大東市埋蔵文化財調査報告第30集

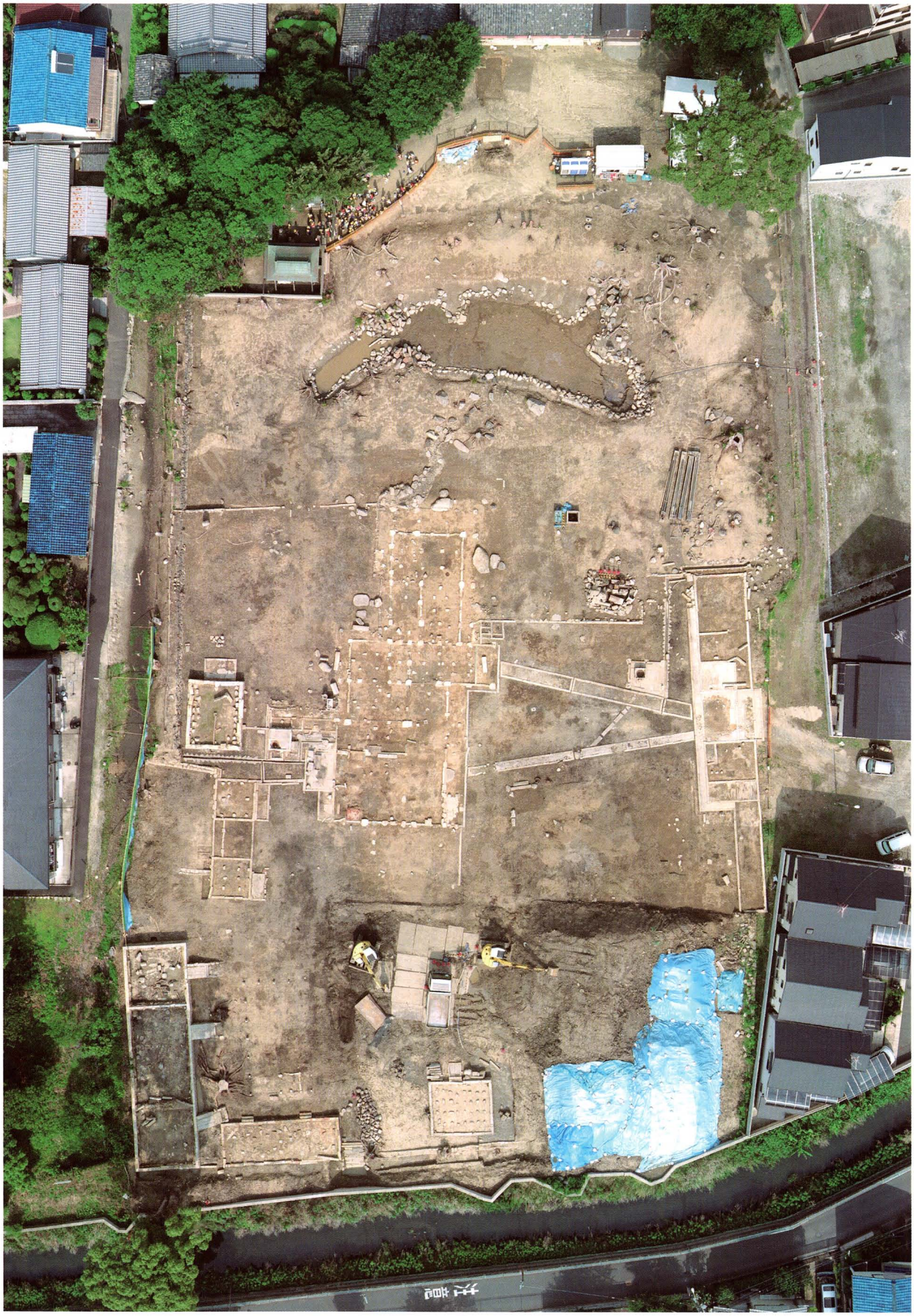
平野屋新田会所跡

確認調査概要報告書

会所表長屋門

２０１０年３月
大東市教育委員会

巻頭図版一　会所航空写真



巻頭図版二　解体前の会所

表長屋門（南西より）

井戸①と覆屋（南西より）

主屋棟（南東より）

主屋建物正面（南より）

土蔵②＜米蔵＞（南東より）

土蔵③＜道具蔵＞と船着場入口（東より）

北側周濠跡＜舟入推定部分＞（東より）

南側周濠跡（西より）

序　文

かつて、大東市の平野部には、深野池と呼ばれた大きな池が存在していました。江戸時代の学者、貝原益軒の『南游紀行』によれば、池の大きさは南北二里、東西一里もあったとされています。

しかし、池が存在したのも江戸時代中期頃までのことで、宝永元(1704)年の大和川付け替え工事により、旧大和川筋では新田開発が進み、深野池でも開発工事が行われ、広大な新田が誕生します。これ以降、本市は大都市大坂の近郊農村として発達を遂げ、今日に至っています。この意味において、深野池の新田開発は本市の礎を築いたといっても過言ではありません。

開発工事は東本願寺難波別院により着手されますが、工事が完了すると平野屋や鴻池といった当時の有力商人らが新田の所有者となり、その経営に乗り出して来ます。彼らは出先機関として「会所」と呼ばれる建物を設置して、そこに支配人を置き新田の管理・運営にあたらせました。

平野屋新田会所は深野池に開かれた新田のうち、深野南新田と河内屋南新田の管理・運営のために設けられたものです。つい最近まで、広い屋敷地には樹木が鬱蒼と生い茂り、主屋や土蔵、正面には立派な長屋門が建っていました。現存する会所建物は、鴻池新田会所等、府下でも数箇所しかなく貴重なものであるため、教育委員会ではその保存に努めてきましたが、残念ながら諸事情により建物は取り壊され、樹木も伐採されてしまいました。

とはいえ、会所は新田開発の象徴であり、本市の歴史を語る上でも欠くことのできない、貴重な文化財であることには変わりなく、教育委員会では解体後の状況を確認するための調査を実施いたしました。調査の結果、そこにはまだ礎石や遺構が良好に残り、会所の貴重な歴史が刻まれていることを確認できました。その成果をまとめたのが、本書です。短期間の調査ながら、建物の複数回の建て替えや船着場が遺存していることが確認ができ、得られた知見は今後、会所を研究する上で大いに役立つものと考えています。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係各位、関係機関、地元の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成22年3月
大東市教育委員会
教育長　中口　　馨

例　言

1．本書は大東市平野屋１丁目に所在する平野屋新田会所跡の確認調査概要報告書である。
2．調査は平成20年度国庫補助事業として、大東市教育委員会生涯学習課が実施した。
3．現地調査は大阪府教育委員会文化財保護課の応援を受けて、大東市教育委員会生涯学習課黒田淳を担当者として、平成20年５月９日から同年６月13日まで実施した。
4．本書の執筆・編集は黒田が行った他、第４章については大阪府教育委員会松岡良憲がその一部を執筆している。
5．本書で使用した標高は東京湾平均水面(T.P)、座標は世界測地系国土座標第６座標系、方位は座標北である。
6．現地での作業は株式会社島田組、写真測量は株式会社アコード、現場写真撮影の一部を有限会社阿南写真工房に委託した。また報告書作成にあたり、遺物実測及び版下作成は株式会社地域文化財研究所、遺構図面の作成は特定非営利活動法人環境デザイン・エキスパーツ・ネットワークにそれぞれ委託した。
7．出土品及び図面・写真等の記録類は、大東市教育委員会において保管している。
9．調査の実施並びに本書の作成にあたっては、以下の方々及び機関のご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

粟野隆、伊藤正義、井上伸一、大山えりか、榊原和彦、佐久間貴士、関真一、地村邦夫、土橋正彦、平澤毅、藤永正明、松岡良憲、宮崎泰史、三好玄、森屋直樹、藪田貫、吉田高子
文化庁、奈良文化財研究所、大阪府教育委員会、大阪産業大学
株式会社住、平野屋地区

本文目次

第１章　地理的歴史的環境 ……1
第２章　経緯と調査方法 ……1
　第１節　調査に至る経過
　第２節　調査方法
第３章　平野屋新田会所の概要 ……4
　第１節　歴史的背景
　第２節　解体前の会所屋敷
第４章　調査成果 ……5
　第１節　遺構
　第２節　遺物
第５章　まとめ ……33
　報告抄録

挿入写真

写真１　主屋建物礎石（１） ……9
写真２　主屋建物礎石（２） ……10

表

表１　遺物観察表 ……29
表２　新田会所対照表 ……34

挿図目次

第１図　大東市位置図 ……1
第２図　大和川付け替え前の様子 ……2
　（深野池と新開池）
第３図　大正７年写し会所絵図 ……3
第４図　主屋建物渡り部平面図・立面図 ……5
第５図　主屋建物平面図・立面図 ……6
第６図　会所全体図 ……7～8
第７図　表長屋門平面図 ……11
第８図　表長屋門居宅部分平面図 ……12
第９図　裏長屋門平面図・立面図 ……12
第10図　土蔵①平面図・立面図 ……13
第11図　土蔵④平面図・立面図 ……13
第12図　土蔵②平面図・立面図 ……14
第13図　土蔵③平面図・立面図 ……15
第14図　池～築山①平面図・断面図 ……16
第15図　井戸①平面図・立面図・断面図 ……17
第16図　井戸②平面図・立面図・断面図 ……17
第17図　西側塀基礎平面図・立面図 ……18
第18図　船着場平面図・立面図・断面図 ……19
第19図　調査地東西方向断面図 ……20
第20図　国産磁器実測図 ……21
第21図　国産陶器・土製品・ガラス実測図 ……22
第22図　軒丸瓦・丸瓦実測図 ……23
第23図　軒平瓦・平瓦・井戸瓦実測図 ……24
第24図　石製品実測図 ……25
第25図　銭貨拓影 ……25
第26図　金属製品実測図 ……26
第27図　木製品実測図（１） ……27
第28図　木製品実測図（２） ……28

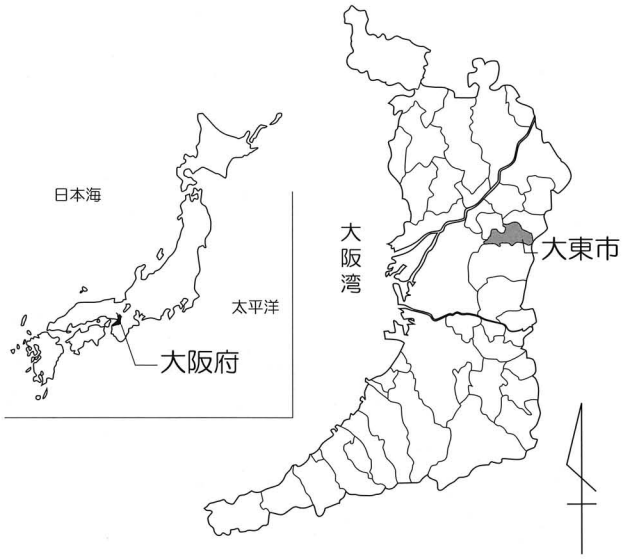
巻頭図版

巻頭図版一　会所航空写真
巻頭図版二　解体前の会所

図版目次

図版一　会所全景
図版二　主屋建物（１）
図版三　主屋建物（２）
図版四　主屋建物（３）
図版五　主屋建物（４）
図版六　表長屋門
図版七　裏長屋門
図版八　土蔵①屋敷蔵
図版九　土蔵②米蔵
図版十　土蔵③道具蔵
図版十一　土蔵④
図版十二　庭園（１）
図版十三　庭園（２）
図版十四　池（１）
図版十五　池（２）
図版十六　井戸
図版十七　塀
図版十八　船着場
図版十九　その他・周濠トレンチ
図版二十　遺物（１）陶磁器類・土製品・石製品・ガラス製品
図版二十一　遺物（２）瓦
図版二十二　遺物（３）木製品・金属製品

第１章　地理的歴史的環境



第１図　大東市位置図

平野屋新田会所跡の所在する大東市は大阪府の中部にあり、河内平野のほぼ中央部に位置している。市域の周囲は東南端の一部で奈良県生駒市と接するほか、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市、南は東大阪市に接している。市域の面積は約18.27km^{2}で、人口127,982人（平成22年２月末現在）である。

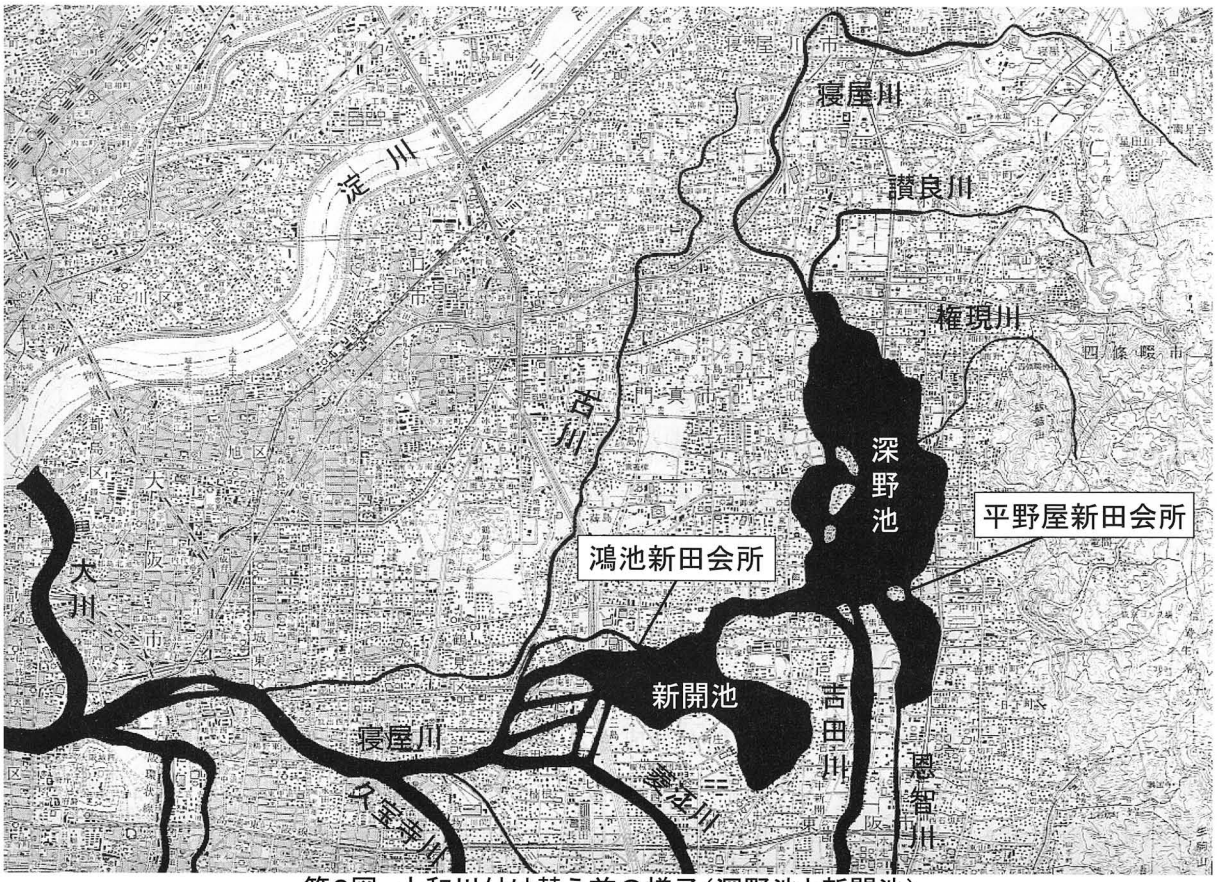
市域の東半分は生駒山系による山地・丘陵地で占められており、市街地のすぐ背後には標高314.3mの飯盛山が存在する。およそ西半分は標高約１～５m足らずの平地がほとんどで、河内平野全体からしても、最も低い場所となっている。山地・丘陵地と平野部との間には飯盛山から流れ出す中小河川によって形成された小規模な谷口扇状地が見られ、そこでは標高９～20mの微高地が形成されている。平野部は沖積層から成り、地盤の悪い低湿地性の粘土やシルトが堆積しているが、これは縄文時代前期～中期頃に起こった海進現象により生駒山麓際まで海水が入り込み、かつて河内平野全体に広大な湾（河内湾）が形成されていたことに起因している(註1)。その後、河内湾は淀川や柏原方面から北流していた旧大和川の分流である諸河川(註2)の堆積作用と水域の後退等で、上町台地を境として外海と隔てられるようになり、弥生時代前期頃には次第に淡水化が進み潟（河内潟）となっていたが、さらに古墳時代頃になると完全に外海と隔てられるようになり、淡水湖（河内湖）となっていた。この湖は古代末～中世にかけてその範囲が縮小し、「勿入渕（ないりそのふち）」(註3)や「廣見池（ひろみいけ）」(註4)等の名称で呼ばれるようになり、近世初頭頃にはさらに規模が縮小し、本市の平野部では深野池と呼ばれる池となっていた。深野池には前述のように南からは大和川の分流である諸河川、北からは寝屋川が流れ込んでいたが、河床は次第に高くなり、大雨の度に堤防の決壊が相次ぎ、流域や深野池の周辺は水害が絶えない地域であった。しかし、江戸幕府の治水対策として、宝永元年（1704）に行われた大和川付け替え工事で、深野池では新田開発が行われその姿を消し、本市の現在の地形が出来上がった。

第２章　経緯と調査方法

第１節　調査に至る経過

平野屋新田会所跡は大東市平野屋１丁目315番地に所在する。敷地の西側には銭屋川が流れ、南側は大阪から奈良へ通ずる古堤街道が通り、また、周辺の水路には弘化２年（1845）の銘が刻まれた通称「三反物（さんだんもん）の樋」や「どんばの伏せ越し樋」等の樋門が存在し、近隣にはかつてこの新田の小作人であった子孫の家が残っている。最寄りの駅（JR学研都市線住道駅）からある程度の距離があったためか、高層建築物による開発がされておらず、それらを含めた周囲の景観は、新田開発当時の原風景が比較的保たれているといえる。

大木が生い茂る屋敷地の南面には表長屋門、北面には裏長屋門を構え、敷地内には大きな主屋や土蔵が建っていた。この会所は、江戸時代中期の新田開発に伴い設置されたもので、国史跡に指定されてい



第2図　大和川付け替え前の様子（深野池と新開池）

る鴻池新田会所(註5)と同様の機能を持つもので、新田開発の歴史を語る上で貴重なものであった。本市でもその重要性から保存の方法を模索してきたが、当時の所有者の諸事情により大阪地方裁判所の強制競売の対象となっており、その動向を見守りつつ競売の結果を待って、今後の方向性を示すこととなっていた。競売は平成18年12月20日から27日に期間競争入札が行われ、平成19年１月９日に開札、同年３月15日に売却決定がなされた。その後、新所有者との取得交渉を行ったが合意に至らず、平成20年１月に樹木伐採、建物の解体工事が開始されたため、再度交渉を持つが不調に終わった。平成20年１月17日付で周知の埋蔵文化財包蔵地「平野屋新田会所跡」として登録し、解体工事期間中は市教育委員会が現場立会を行っていくこととなった。解体工事、樹木伐採は平成20年２月末までにかけて行われ、現存していた建物についてはすべて取り壊されてしまった。ただ建物の礎石や庭園等、会所を構成する主要なものは遺構として遺存しており、所有者の協力を得て、遺存状況の確認調査を平成20年５月９日から同年６月13日に実施した。

なお、調査期間中の平成20年６月８日には現地説明会を実施した他、平成21年２月11日には、この調査成果を踏まえて、「平野屋新田会所その歴史と意義を考える－新田開発と会所－」と題したシンポジウムを開催した。（平成20年度国庫補助事業）

第２節　調査の目的と方法

確認調査着手時における平野屋新田会所跡の状況は、主屋や土蔵等の建物が取り壊され、また、大半の樹木が伐採された後、部分的に根株が掘り起こされ、藤蔓や雑草が生い茂る中に瓦礫が散乱した状態であった。この様な状況で実施する調査の主要目的として、以下の項目について留意した。

①建物解体後、礎石や石積み等の遺存状況の確認。

②建物解体時、既に埋没した状態であった庭園・周濠・船着場等の遺存状況の確認。
③未知の遺構の有無の確認。

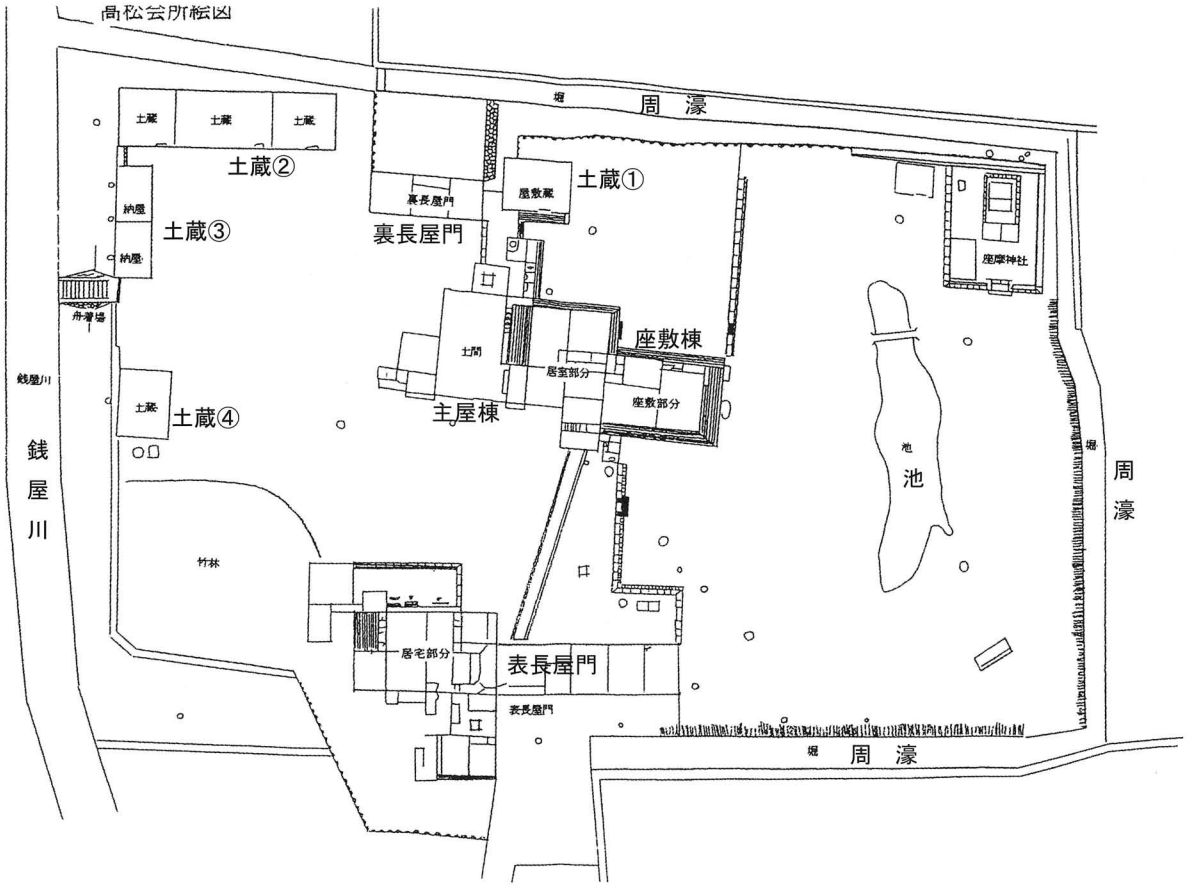
①については、先行して解体時に堆積した瓦礫や赤土を除去しなければならず、これらの作業にかなりの労力と時間を要するものであった。そこで瓦礫除去と必要最小限の堆積物除去を建物跡全体について実施することで遺存状況の把握に努めた。

②については、周濠以外は遺存状態を明らかにするため、部分ではなく全容を確認することとし、可能な限り堆積物を除去することとした。周濠については既に絵図等で凡その位置と規模が推測可能で、それらを考慮に入れ、遺存状況を確認するため屋敷の西側(銭屋川)を除く北・東・南の周濠部分３箇所でトレンチ調査を実施した。

③は銭屋川側の空間地・表長屋門北側の空間地・裏長屋門北側の空間地・庭園跡北側の空間地等の表土を掘削し、絵図に描かれている建物の礎石や柱穴等の遺構の確認に努めた。特に船着場については、銭屋川の護岸改修工事の影響をどれだけ受けているのかを確認する必要があった。

今回の調査は期間が１カ月に限られていたため、掘削作業は、重機による掘削と人力掘削を併用し、また、実測作業についても、作業の効率化を図るため、平面実測は空中写真測量による図化を行った。但し、詳細な立面図や断面図については、今回の調査では計測を見送ったが、大阪産業大学人間環境学部土橋正彦教授の申し出により、レーザー光線による３Ｄ測量を実施していただいた。現場での計測条件にもよるが、データを処理すれば調査後でも調査区全体の断面図はもちろん石積み等の立面図の作成もある程度可能ということであった。

また、今回の調査はあくまでも現況の確認調査であるため、礎石等の掘り起こしや移動は一切行っていない。調査終了後は所有者の希望もあり、排出土を使用してできる限り遺構に被せている。



第３図　大正７年写し会所絵図

(「旧平野屋新田会所屋敷と建物」2002 大東市教育委員会に加筆)

第３章　平野屋新田会所の概要

第１節　歴史的背景

宝永元年(1704)に行われた大和川付け替え工事は、これまで幾筋にも分かれ、河内平野を北流していた大和川を直線的に堺へ流すようにしたもので、付け替え工事後、旧河床跡や池跡で新田開発が行われ、34箇所の新田が誕生した。現在の東大阪市域に存在した新開池とともに、大東市域でも深野池で新田開発が進められた。

深野池の主要部分である深野新田の開発は、付け替え翌年の宝永２年(1705)から開始され、全事業が終了したのは正徳３年(1713)で、約９年間の期間を要している。この開発に先立つ宝永元年(1704)、南北に長い深野池の北と南部分が河内屋源七により開発され、河内屋北新田・河内屋南新田が誕生している。開発は当初、東本願寺灘波別院の講員により入札、献納されたもので、宝永２年から開墾された。享保４年(1719)の再検地時では、深野新田は３分割され、これらの新田の所有は、いずれも大坂市中の商家に移っており、河内屋北新田が鴻池新十郎、深野北新田、深野(中)新田が鴻池又右衛門、そして、深野南新田、河内屋南新田が平野屋又右衛門(註６)の所有となっていた。

会所は、所有する商家が出先機関として設置したもので、現地に支配人を置き、新田の管理・運営等の業務にあたらせた。この時期の各新田にはこのような会所が置かれ、このうち平野屋新田会所は、名前の通り、平野屋又右衛門が所有した深野南新田、河内屋南新田の管理・運営のため設けられた施設である。

平野屋新田会所が設けられた正確な時期は明らかではないが、平野屋新田会所文書中(註７)の享保４年(1719)から５年(1720)に書かれた「諸方相対証文控」に平野屋会所の文字が見られ、また、享保13年(1728)大坂市中から当会所に分祀された坐摩神社(註８)について書かれた「鎮守御宮御祭礼之控」にも平野屋会所の文字が出てくることから、18世紀前半までの新田開発が終了した時点で既に存在していたことが推定される。

その後、所有は延享２年(1745)大坂上町船越町両替商助松屋忠兵衛(註９)に移り、次いで享和３年(1803)天王寺屋八重(後に天王寺屋源助(註10))に、そして文政７年(1823)には最後の所有者である大坂北九太郎町銭屋(高松)長左衛門(註11)の手に渡る。その後の経過は前述の通りである。

第２節　解体前の会所屋敷

解体前の平成12・13年に会所の建物の調査を実施(報告書(註12)は平成14年に刊行)している。以下はその報告をもとに記述する。

屋敷地は東西約90m、南北約60mを測り、南面西寄りに表長屋門、北面西寄りに裏長屋門を設けている。「大正７年写し絵図」(註13)によると、屋敷地の西側は銭屋川、残り３方は濠で囲まれた形態で、濠は銭屋川と繋がっていたものと推定され、北側と南側で濠の痕跡が確認できた。北東に鎮座する坐摩神社は、本来屋敷地内であったが、現在はその境内も含めて屋敷地外となっている。境内部分は東側の濠が廻る部分で、既に埋められた状態であったが、神社東側にある窪地部分(通路として利用されている)にその痕跡が認められる。

銭屋川側には、屋敷専用の船着場があり、絵図には川へ降りて行く階段が示されているが、解体時には既に埋没した状況であった。

主屋建物は屋敷地の中央部に建てられており、西側が土間のある主屋棟、東側が庭園に面する座敷棟

から成る。また、絵図に見られる主屋棟南西部に付属していた建物については、建物調査時の段階で既に無くなっていた。

座敷棟に面して、東側に造られた庭園には瓢箪形の池があり、絵図には池の北部分に橋が設けられていたように描かれているが、この橋も既に存在していなかった。この時期に造られた会所と同規模の屋敷のほとんどが東側に庭園を持つが、これは生駒山を借景にして庭園を造るためで、鴻池新田会所の庭園も同じ配置となっている。

その他、絵図と比較すると、道具蔵の南に土蔵が存在していたことと、表長屋門の西側に管理・居住棟が接続していた点が異なるが、建物の配置に大差はない。

また、座敷棟には棟札が残っていたので、明治25年に上棟されたことがわかっている。これは前年の明治24年の濃尾大地震により座敷棟が被災し、座敷棟を建て直したものと推定されている。なお、この棟札(註14)については、解体時に本市教育委員会で回収し保管をしている。

建物調査報告による各建物の状況は以下の通りである。

(主屋建物)

主屋棟　桁行９間(17.73m)、梁行5.5間(18.4m)、ツシ２階建南面。西面・切妻造、東面・入母屋造、桟瓦葺(もと本瓦葺)・２段葺、南面土庇・桟瓦葺(もと本瓦葺)。
南面玄関角部屋、入母屋造、桟瓦葺。北面・井戸屋角部屋

座敷棟　桁行6.25間(12.31m)、梁行4.5間(9.13m)、平屋建、南面。
主屋棟東面南側に接続、西面・切妻造、東面・寄棟造、２段葺、桟瓦葺。南面・東面土庇

(附属建物)

表長屋門　桁行11間、梁行２間、切妻造、桟瓦葺(もと本瓦葺)、南面。
裏長屋門　桁行６間、梁行２間、切妻造、桟瓦葺、北面。
土蔵①(屋敷蔵)　土蔵造、２階建、桁行５間、梁行３間、切妻造、桟瓦葺、南面庇附属。
土蔵②(米蔵)　土蔵造、桁行11間、梁行３間、切妻造、本瓦葺。
土蔵③(道具蔵)　土蔵造、桁行６間、梁行２間、切妻造、桟瓦葺。

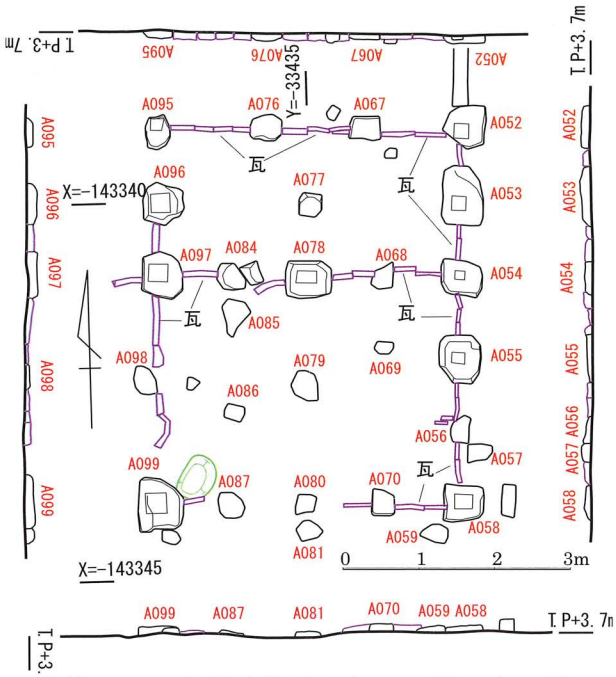
第４章　調査成果

第１節　遺構

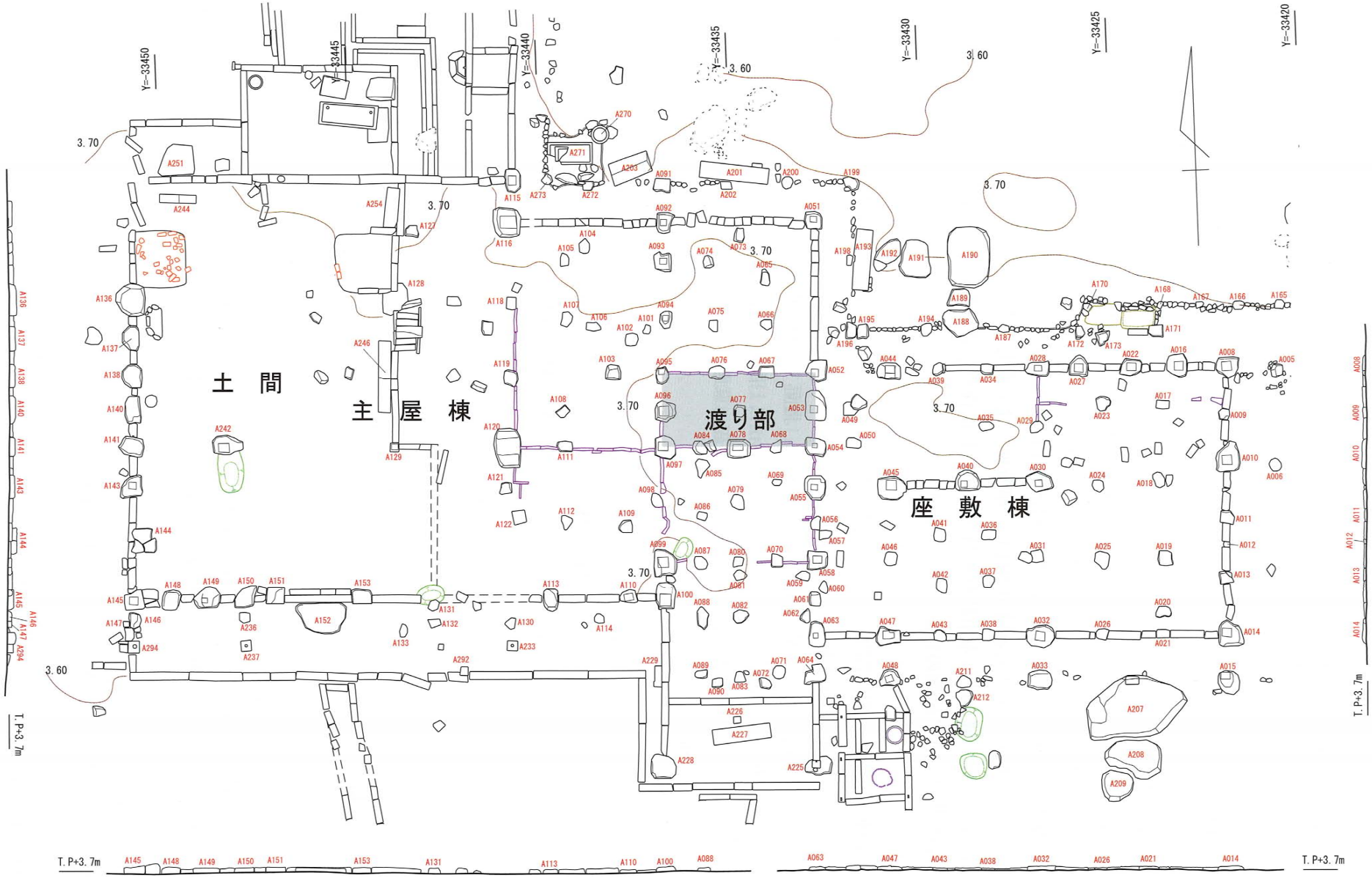
１．主屋建物

屋敷地の中央に建てられていた東西方向棟行約31m、南北方向梁間約15mを測る東西に長い建物で、土間のある西側の主屋棟と東側の座敷棟から成る。

当初は主屋棟と座敷棟が別棟であった(平成14年３月の上屋建物調査報告)と考えられており、今回の発掘調査においても棟行７間・梁間5.5間の主屋棟、棟行6.25間・梁間4.5間の座敷棟が、幅１間・長さ２間の「渡り部」で繋がっていたと推測される礎石配置を検出した。この渡り部はその後、前後に玄関・中の間・茶の間を増築し、渡り部自体は押し入

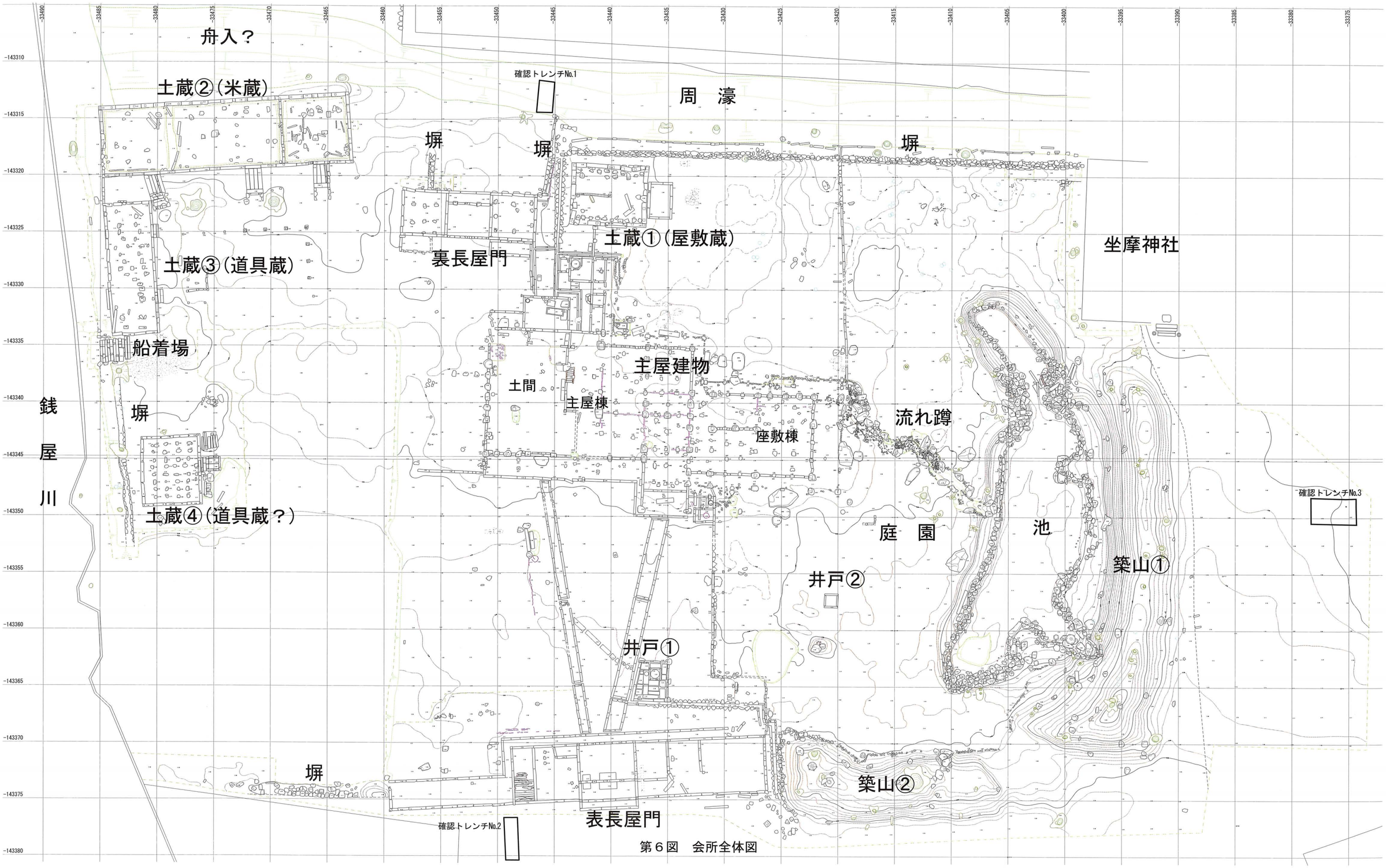


第４図　主屋建物渡り部平面図・立面図



0 1 2 3 4 5m

第５図　主屋建物平面図・立面図


舟入？
土蔵②（米蔵）
確認トレンチNo.1
周　濠
塀
塀
塀
土蔵①（屋敷蔵）
裏長屋門
土蔵③（道具蔵）
坐摩神社
船着場
主屋建物
土間
主屋棟
銭
屋
川
塀
流れ蹲
座敷棟
土蔵④（道具蔵？）
確認トレンチNo.3
庭　園
池
築山①
井戸②
井戸①
塀
築山②
表長屋門
確認トレンチNo.2

第６図　会所全体図

A001
A027
A047
A002
A028
A051
A008
A030
A052
A010
A032
A053
A014
A044
A054
A016
A045
A055

写真１　主屋建物礎石(1)

A058
A096
A120
A063
A097
A140
A077
A099
A141
A078
A100
A143
A092
A115
A145
A093
A116
A148

写真2　主屋建物礎石(2)

れ・床等に改築されたものと考えられる。年代としては平成14年３月の報告にあるように、発見されている棟札より座敷棟は、明治25年(1892年)の上棟とされ、主屋棟はこれ以前、18世紀中頃まで遡る可能性を指摘されている。となると「大正７年写し絵図」では繋がった１棟の建物として描かれており、明治25年から大正７年の間で増改築され１棟の「主屋・座敷棟」となったものではないかと推察される。

また、検出した礎石には墨書でその位置を示す漢数字や墨線が残るものがあり、方形の柱座を削り込んでいるものもあった。複数の柱座を重複して削り込まれているものがあることから、礎石の転用が認められる。束石は古い建物のものが放置されたままと推定しうるものもあり、前身の主屋棟・座敷棟があったと推察できる。

座敷棟玄関の東側に、布基礎に囲まれた状態で埋甕と埋鉢が検出された。

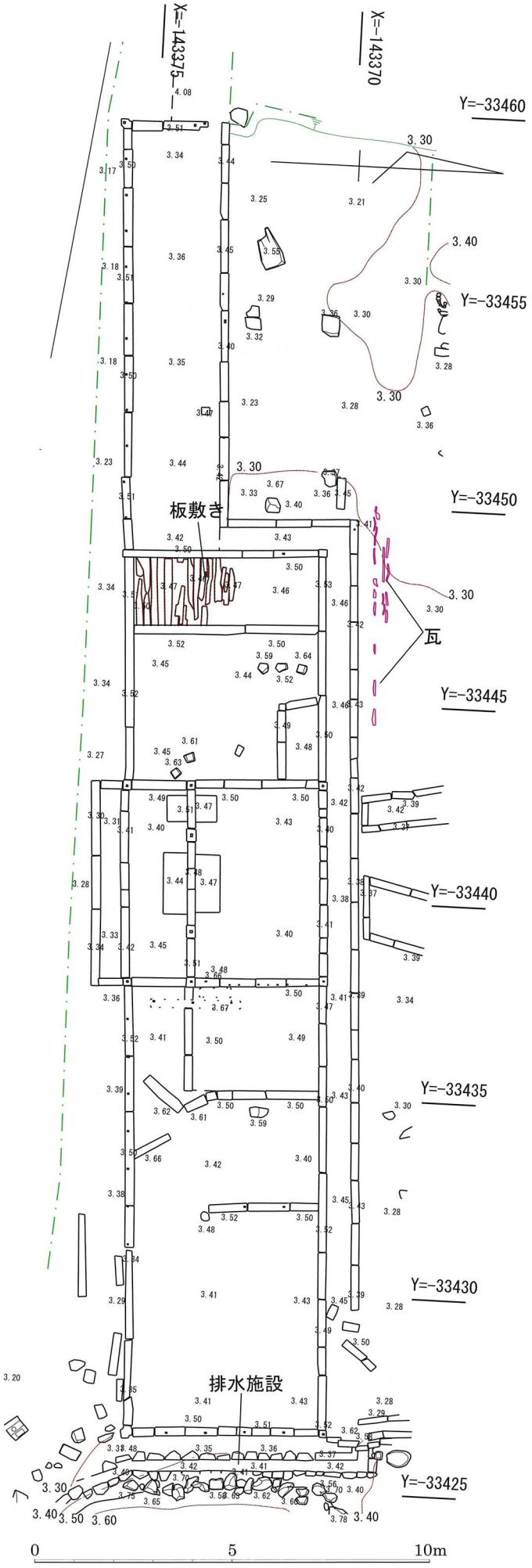
なお、主屋棟南西側において礎石を検出しており、絵図に描かれた付属の建物のものと推定される。

２．長屋門

表長屋門

東西方向棟行約22.5m、南北方向梁間約５mの建物の西側に前面を揃えて、東西方向棟行約11m、南北方向梁間約2.5mの部屋を造る。また、東西約33.5mの長い建物のやや東寄りに扉構えの礎石等を確認した。扉構え東側は３部屋に区切られて、西側も前述の東西に細長い部屋を含めて３部屋に区切られているが、束石等は解体時に失われたようで、殆ど遺存していなかった。ただ、１部で床と思われる板を並べた構造が遺存していた。

この長屋門は伝わる話よると、昭和９年9月の室戸台風後再建されたもので、現在残る基礎はその時ものであるが、それ以前の長屋門の遺構としては、東端の南北方向の雨落ち溝が花崗岩を並べたものであり、再建時その

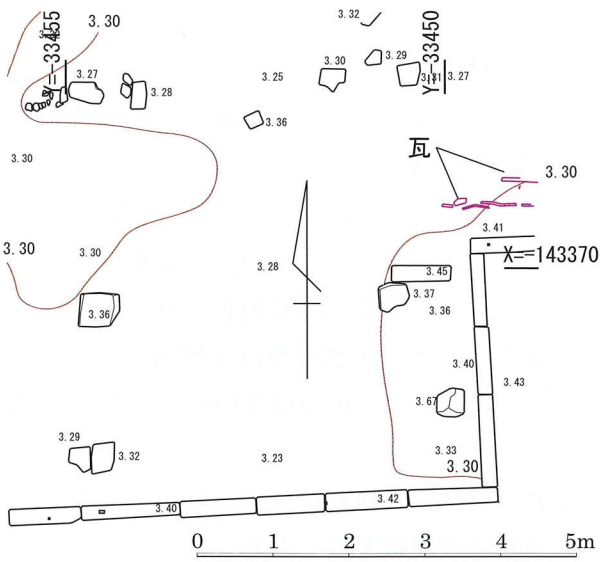


第７図　表長屋門平面図

まま利用したものと思われる。また、長屋門北辺の門構え西側部分で雨落ちと思われる平瓦を並べた幅20cm程の溝を確認している。また、「大正７年写し絵図」に見られる居宅部分についても礎石が遺存することを確認した。

裏長屋門

東西方向棟行約12m、南北方向梁間約４mの建物である。東西の中央に２間幅の扉構えを、その両側に同じく２間四方の部屋を検出した。２つの部屋は南側、屋敷地側に入口を持つ。部屋の束石は、解体に伴い元位置を移動したものがあるが、比較的遺存状況は良好であった。



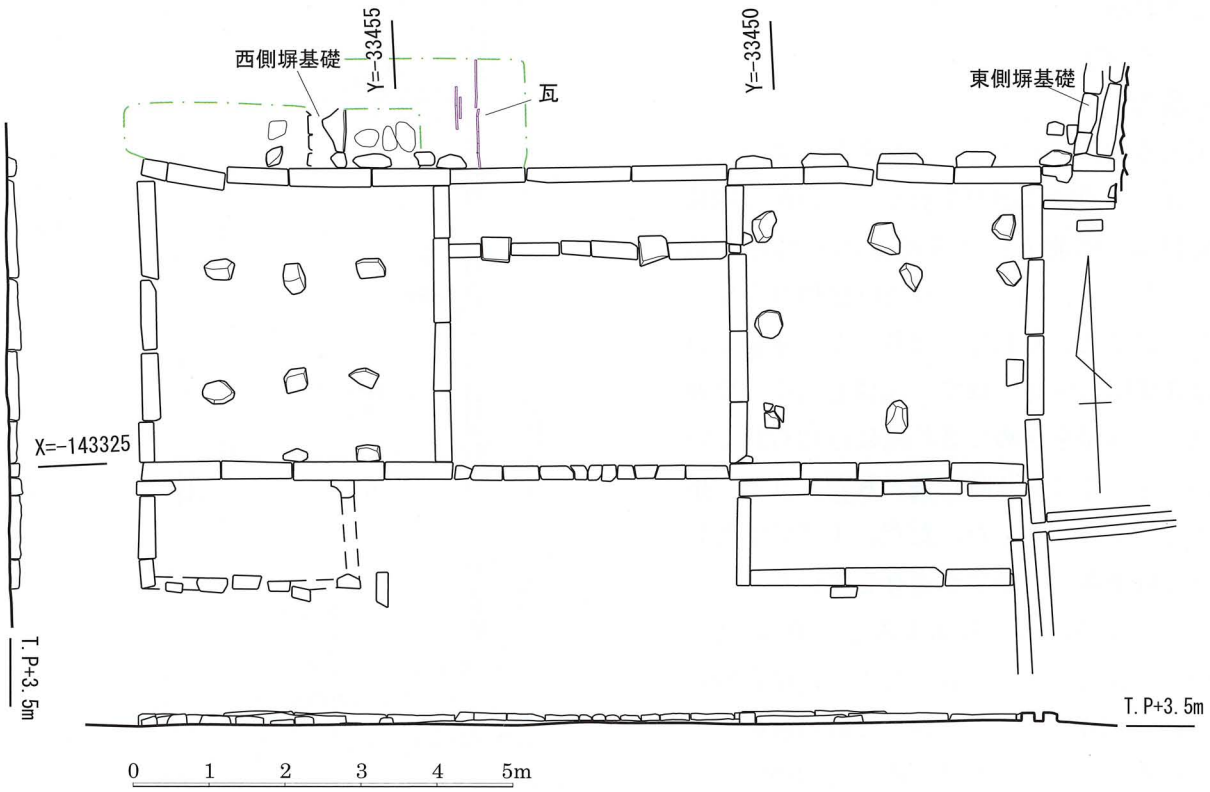
第８図　表長屋門居宅部分平面図

この長屋門の記録等は今のところ確認されていないため、いつ頃のものか仔細は不明である。長屋門北面東側には、この門に繋がる高塀の石積みが遺存しており、これを避けて長屋門北面西側で下層確認を実施したところ、布基礎の石の下に、礎石や壁土と思われる粘土塊を確認した。また、扉構え東側の部屋の北面布基礎の石の下にも、礎石の遺存が認められ、下層遺構として、裏長屋門の前身建物が遺存しているのではないかと推定される。

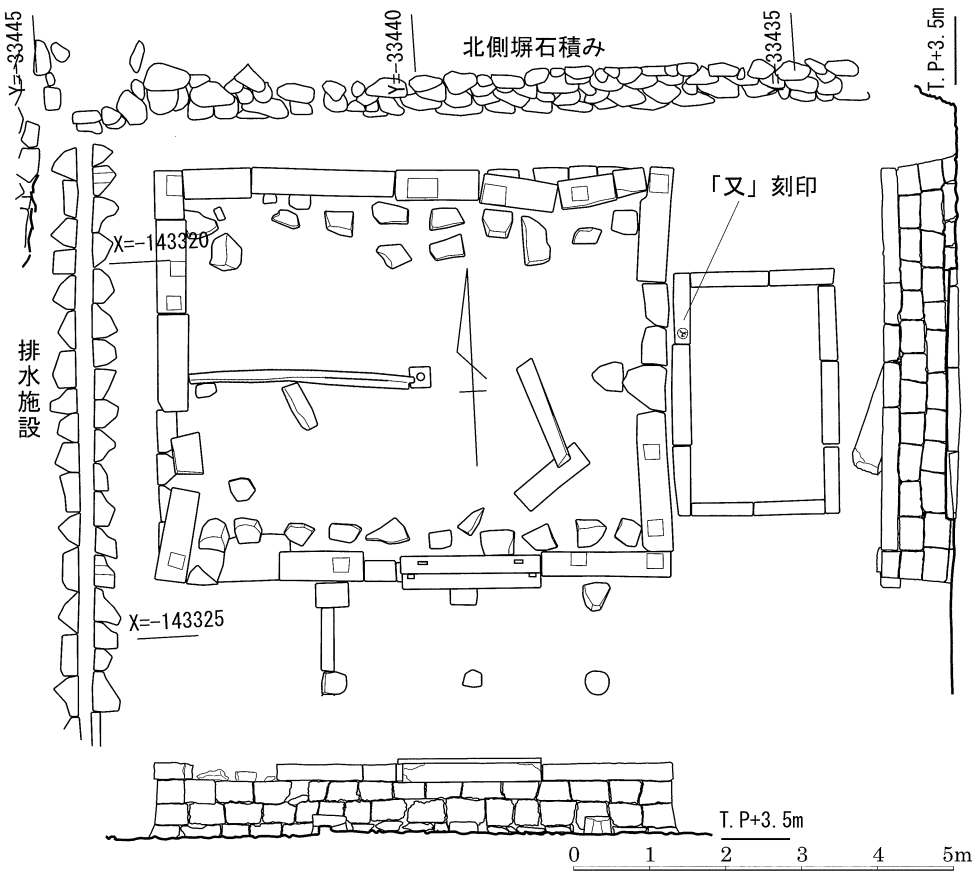
３．蔵

土蔵①（屋敷蔵）

主屋・座敷棟の北、裏長屋門の東に位置する東西方向棟行約6.8m、南北方向梁間約5.5mの建物である。花崗岩切り石積み石垣の上に、入口部のみ花崗岩で他は凝灰岩の布基礎が比較的良好に遺存してい



第９図　裏長屋門平面図・立面図



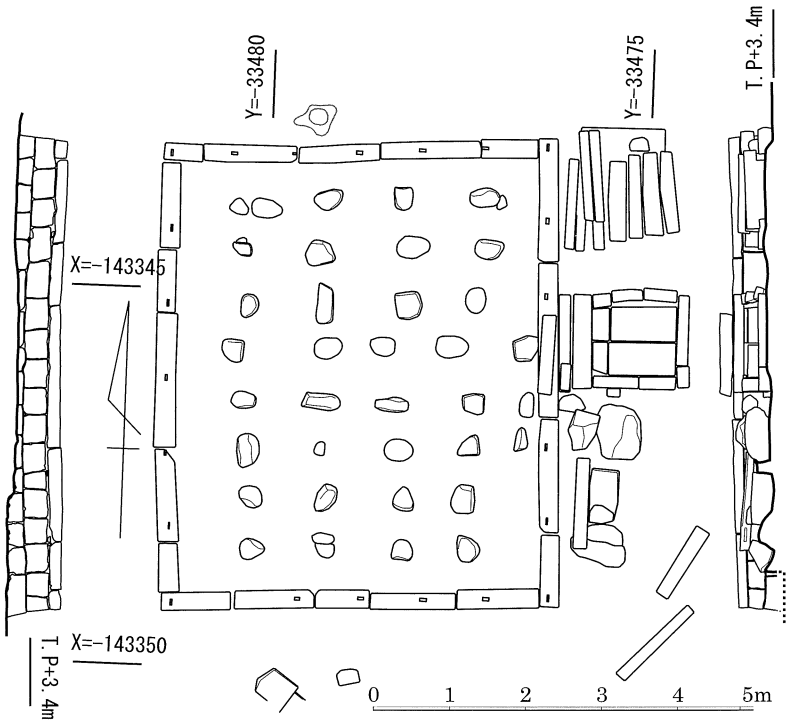
第10図　土蔵①平面図・立面図

た。布基礎の内側は、１部の束石と束石の上に直に置かれた根太が１本のみ遺存しており、解体時に破損したものと思われる。蔵入口の前には0.5間×２間分の礎石が６箇所遺存している。

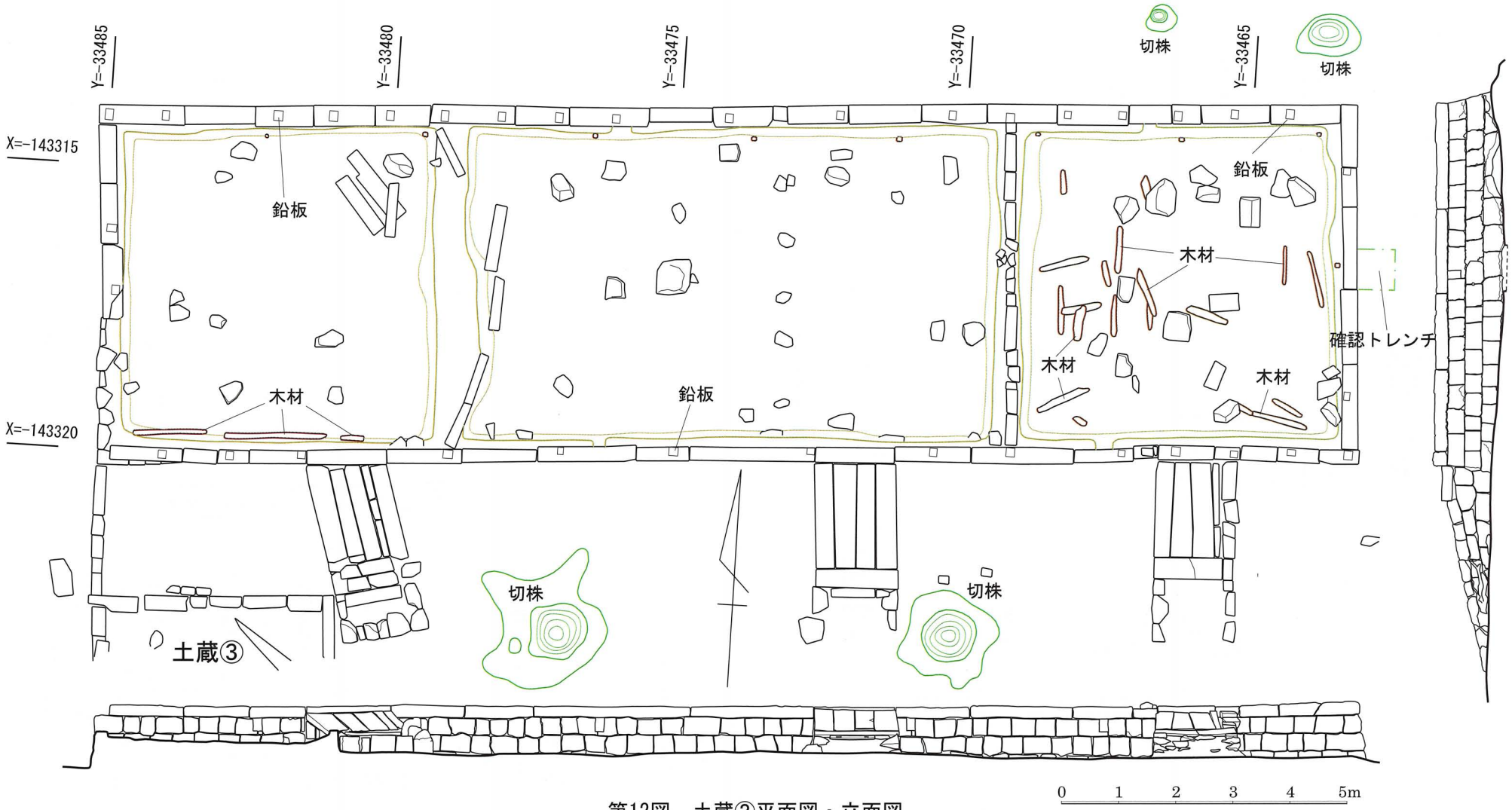
この解体時に棟札(註15)が発見されており、その記載から、前身建物は享保10年(1725年)のもので、明治26年(1893年)に再建されたことが確認できた。

土蔵②(米蔵)

屋敷西北隅に位置する東西方向棟行約22m、南北方向梁間約６mの東西に長い建物である。平成16年の不審火により、解体時は屋根が焼け落ちて壁だけの状態で、また周囲には瓦や束石、焼けた板材が散乱する状況であった。解体時の影響も懸念されたが、花崗岩切り石積み石垣の上に、凝灰岩の布基礎が比較的良好に遺存していた。布基礎には方形の柱



第11図　土蔵④平面図・立面図

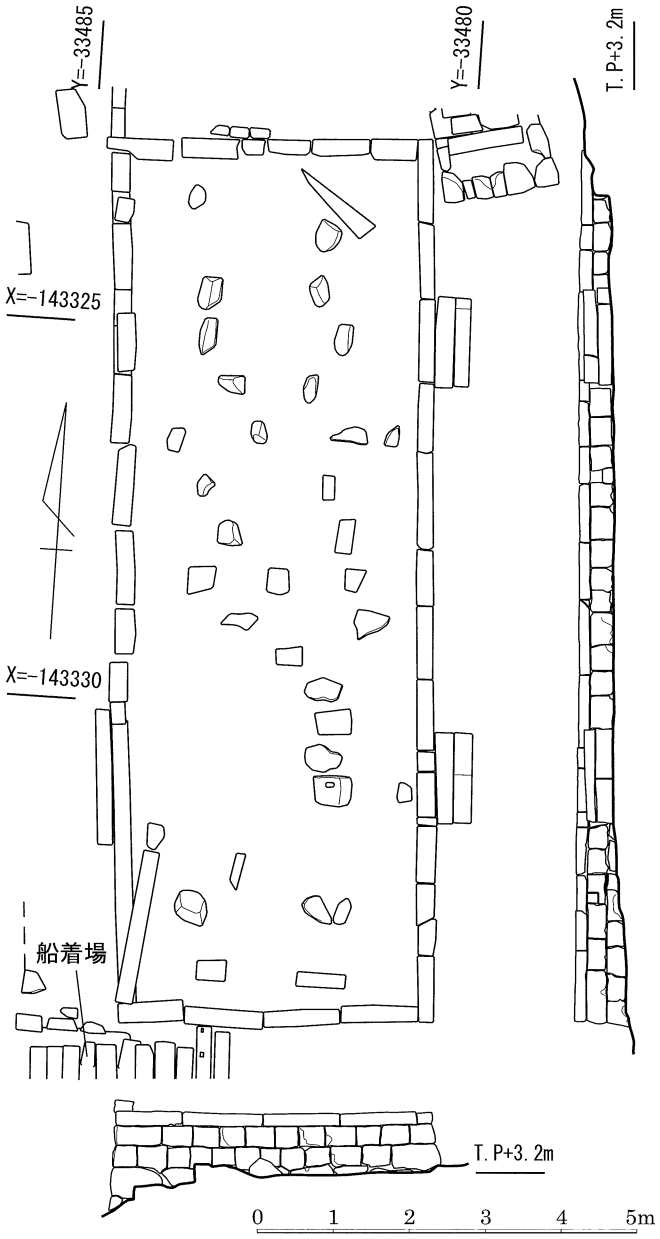


第12図　土蔵②平面図・立面図

座が削り込まれており、柱座とほぼ同じ寸法の鉛板が置かれていた。鉛板は柱を柱座に立てる際に、柱を安定させるために敷いたものであろう。内部は東から約６ｍ、約10m、約６ｍの間隔で布基礎が遺存しており、３室に仕切られていた。各室には南面する出入り口が設けてあり、出入り口前面には角石を用いた斜路が造り付けられていた。また、西面の３段目以下の基礎石と土蔵③の２段目以下の基礎石は共通となっていた。

この蔵については、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石５段積み石垣の上の布基礎に凝灰岩と砂岩が混在することから、18世紀まで遡る前身建物があり、その基礎を再利用して土蔵が立てられていたと推察している。

以前から米蔵として「千石蔵」の名称で呼ばれており、北側の基礎はそのまま周濠に面しており、船を裏長屋門まで入れて、そこから米を運び込んだものと推定される。



第13図　土蔵③平面図・立面図

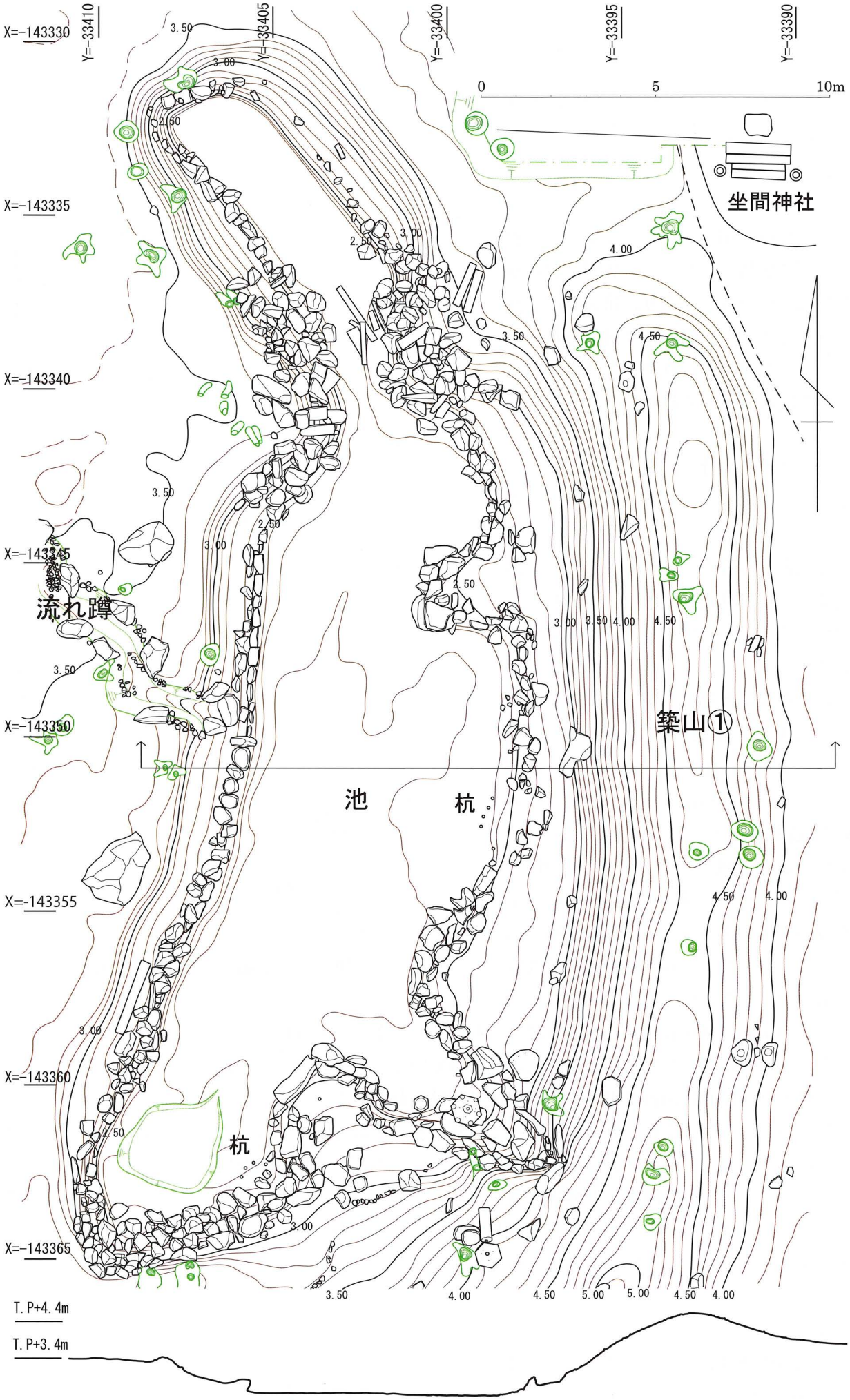
土蔵③（道具蔵）

屋敷西北隅に銭屋川を背にして位置し、米蔵と直角に接する南北方向棟行約11.5m、東西方向梁間約４ｍの南北に長い建物である。花崗岩切り石積み石垣の上に、凝灰岩の布基礎が比較的良好に依存していた。内部は米蔵のように室を仕切る布基礎は認められなかったが、南北棟行方向の中央で半間幅に３箇所の礎石が有り、壁で仕切られて南北２室の構造となっていた。各室には東面する半間幅の出入り口を設けており、出入り口前面に角石を用いた階段が造り付けられている。土蔵②の項で述べたように、西面の２段目以下の基礎石は、土蔵②と共通となっており、元々は同時に建てられたのではないかと推定される。

この蔵についても、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石積み石垣の上の布基礎に凝灰岩と砂岩が混在することから、18世紀まで遡る前身建物があり、その基礎を再利用して土蔵が立てられていたと推察している。なお、道具蔵の呼び名のとおり、解体時、北室には10数基の踏車が収納されていたが、解体時に外へ運び出されたものを教育委員会で回収し保管をしている。

土蔵④

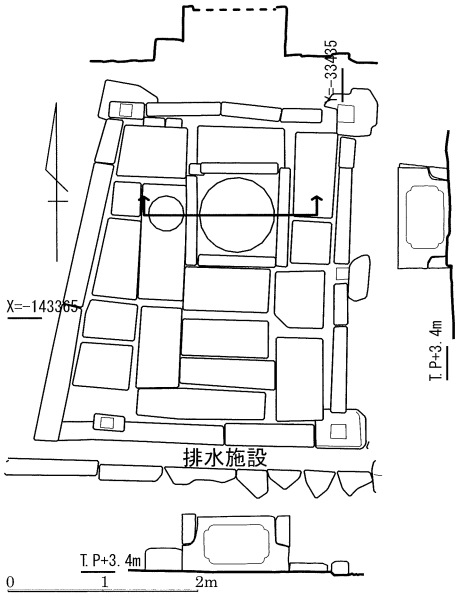
屋敷西端中央部に銭屋川を背にして位置する。南北方向棟行６ｍ、東西方向梁間約５ｍの建物である。「大正７年写し絵図」には見られるが、他の蔵と異なり建物解体時には既に上屋建物は無く、基礎



第14図　池～築山①平面図・断面図

は埋没し雑草で覆われ、その存在すら確認できない状況であった。花崗岩切り石積み石垣の上に花崗岩の布基礎が置かれ、布基礎内部は束石が比較的良好に依存していた。建物の東面中央やや北寄りには半間幅の出入口を設け、土蔵②と同様に出入り口前面に角石を用いた斜路が造り付けられていた。なお、束石の間から農具や工具等の鉄器が出土しており、この蔵の収蔵品と考えるならば、農工具類を収蔵するための「道具蔵」であった可能性がある。

この蔵についても、記録・言い伝え等は確認されておらず、建物の時期は不明である。花崗岩切り石積み石垣の上の布基礎にも花崗岩を多用することから、他の建物と年代的に異なる可能性があるが、詳細は今のところ不明である。



第15図　井戸①平面図・立面図・断面図

4．庭園

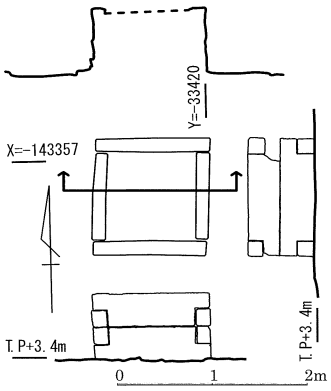
屋敷地の東側にある庭園には、南北方向に築かれた築山①と東西方向に築かれた築山②、そして瓢箪形を呈する池(註16)が設けられ、座敷棟縁側から南東方向に池に向かって小石と岩で造作した流れが造られていた。池と築山の間には、人が通れる程度の空間があることから、池泉回遊式庭園であったことが推察される。

築山①

屋敷地東端、池の東側に幅６～８ｍ、長さ約40m、高さ1.5～２ｍで、南北に細長く僅かに湾曲して築かれていた。築山には灯籠が配置してあったが、かなり以前から原位置から移動していたようである。

築山②

屋敷地南東隅に築山①に１～２ｍ間をあけて直角に幅約８ｍ、長さ約20m、高さ1.5～２ｍで、東西に築かれていた。築山には、石段が設けられ、灯篭も遺存していた。築山の北裾、表長屋門と境となる西裾を廻るように小石が並べられていた。



第16図　井戸②
平面図・立面図・断面図

池

東西に細長く僅かに湾曲して築かれた築山①の西裾に沿うように幅2.5～８ｍ、長さ約30m、深さ0.5～0.8mの池を掘削している。築山①の裾、池の東岸は単純でなく、入り組んだ状況を造っているのに対し、座敷側の池西岸は単純に緩やかな円弧を呈しており対照的である。池の周囲は径30～50cmの石を１から数段で並べている。池の北側で幅２ｍ程に狭くなったところには、絵図によると石橋が架けられていた痕跡が残るが、石材の１部は、既に失われているようである。橋の基礎にあたる部分は１部崩壊しているが、池の縁石と同様のやや大きめの礫を用いて「崩れ石積み」の技法で造られており、比較的良好に遺存していた。また、この「崩れ石積み」技法は、池の南端部にも用いられていた。

今回の調査では確認できなかったが、池西岸の石積みを観察すると、下部にもまだ石積みが存在し、複数回の改修が加えられていることが推定される。

流れ（流れ蹲）

座敷の北東隅から池の西岸中央部に向けて岩を配し、拳大の礫を敷いた延長20m程の「流れ」を検出している。この流れの座敷側北東隅に岩で囲まれた部分があり、床面は三和土と礫で造作がなされており、ここに何かを据えていた痕跡が認められることから、蹲の様なものが置かれていたのではないかと推定される。また、座敷棟屋根からの雨水を池へ排水する機能も兼ねていたものと考えられる。

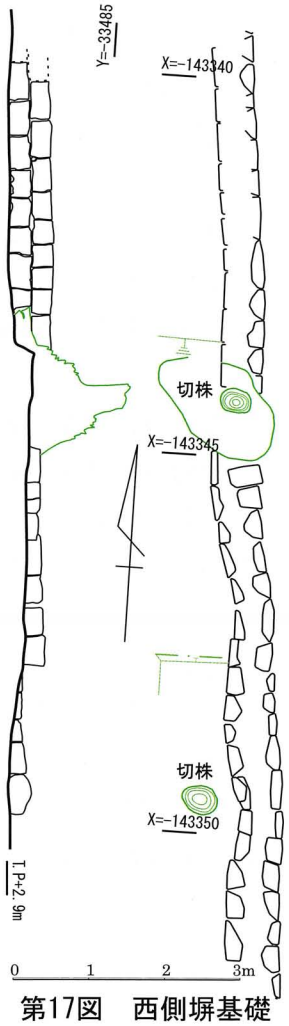
5．井戸

井戸①

表長屋門から屋敷内へ入ると、すぐ右手にある井戸で、解体前は覆屋が存在し、上部構造は花崗岩板石による井戸枠が組まれ、井戸枠周辺は花崗岩板石を敷いて、間知石と布石を使って排水施設を設けてあった。今回は下部構造まで調査を実施していないが、解体前の観察では井戸枠の下は、井戸瓦を４～５段用いて井筒を造り、さらにその下には木材の枠組を確認している。屋敷内へは上水道が敷かれておらず、これが実用の井戸である。解体時は冬のため、水位が低かった。

井戸②

座敷棟、流れ蹲、池、築山②に囲まれた空間のちょうど中央部に設けられている。井戸枠は上部が花崗岩であったが、下部は凝灰岩が使用されていることから、実用のものではなく庭園に設けられた飾りの井戸と考えられる。



第17図　西側塀基礎平面図・立面図

6．塀

濠等で屋敷地を画しており、濠の内側に高塀等を築いていたと考えられるため、その有無の確認を行ったが、調査箇所を確保できたのが西側の銭屋川部分と北側の石垣の１部が残る範囲及び裏長屋門付近だけであり、東・南側では実施できなかった。

北側石積みは、上部に平坦面を持ち、かつて、ここに塀が築かれていたことが推定されるが、かなり早い段階で無くなっており、解体直前まで、トタン波板により柵がされていた。北側石積みはそのまま周濠の南肩に続いている構造となっており、濠の最深部との比高差は、実際の高低差よりも大きく感ぜられる。

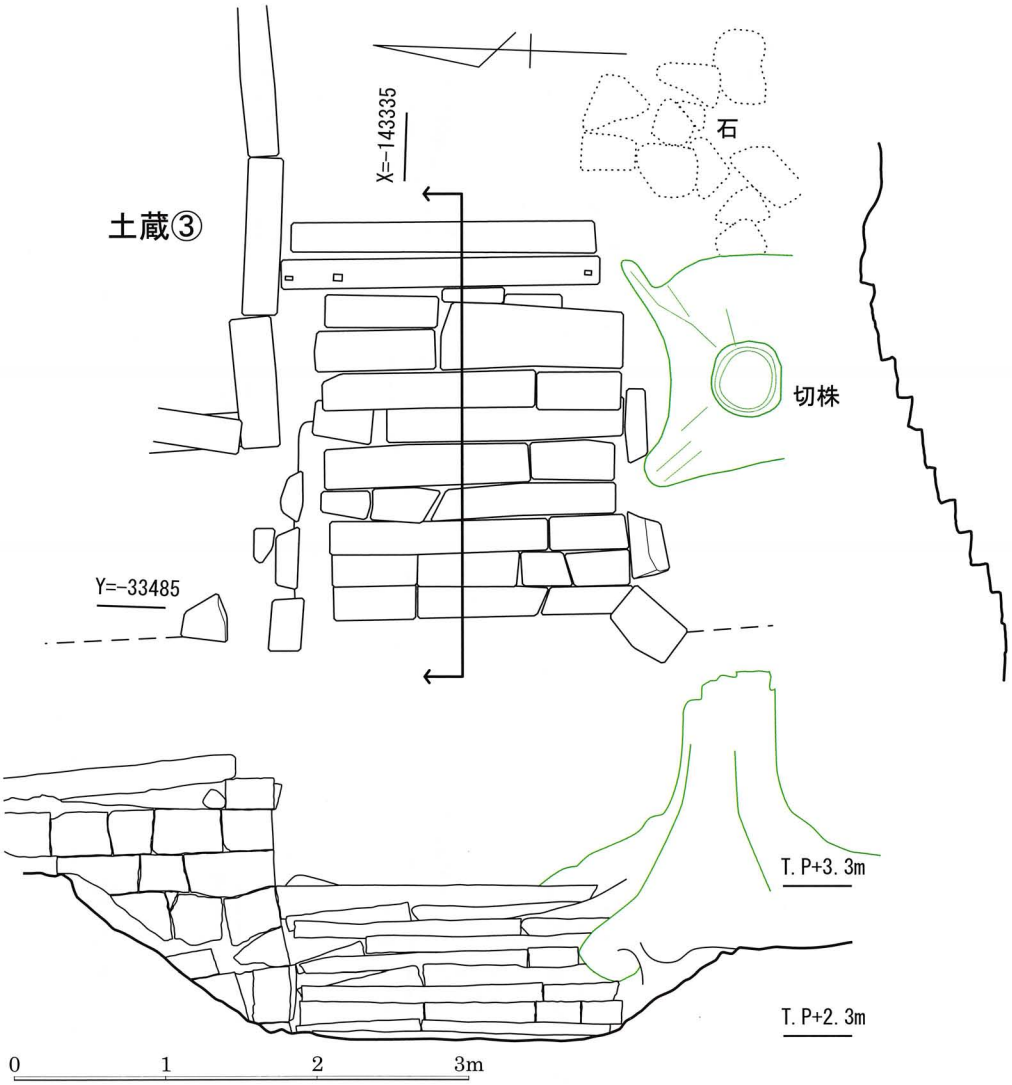
西側の銭屋川に面する部分は、先ず石垣を川に面して築き、幅１m程度の犬走りを設け、花崗岩間知石を積んで上面に幅60cm の平坦面をもつ高塀基礎を検出した。

裏長屋門付近でも門屋東隅から延びる花崗岩間知石を積んだ同様の高塀基礎を検出した。また、下層遺構と思われる類似の高塀基礎も検出している。石垣が残る部分の上面については、60 ～ 80cm の平坦面を持つことも確認出来た。

7．船着場と周濠

船着場

土蔵③（道具蔵）の南西隅に接して設けられていることが「大正７年写し絵図」等から知られていたが、銭屋川の護岸工事で既に消失したものと考えられていた。調査の結果、角石を用いて幅約２m程の階段が検出され、良好に遺存していることが確認できた。石段は10段まで確認することができ、護岸を挟んで、更に銭屋川側にも遺存している可能性がある。階段最上段の東に接して門柱に使用した礎石が残っていたが、解体前に土蔵③に接して出入り口となる門があったことを確認している。



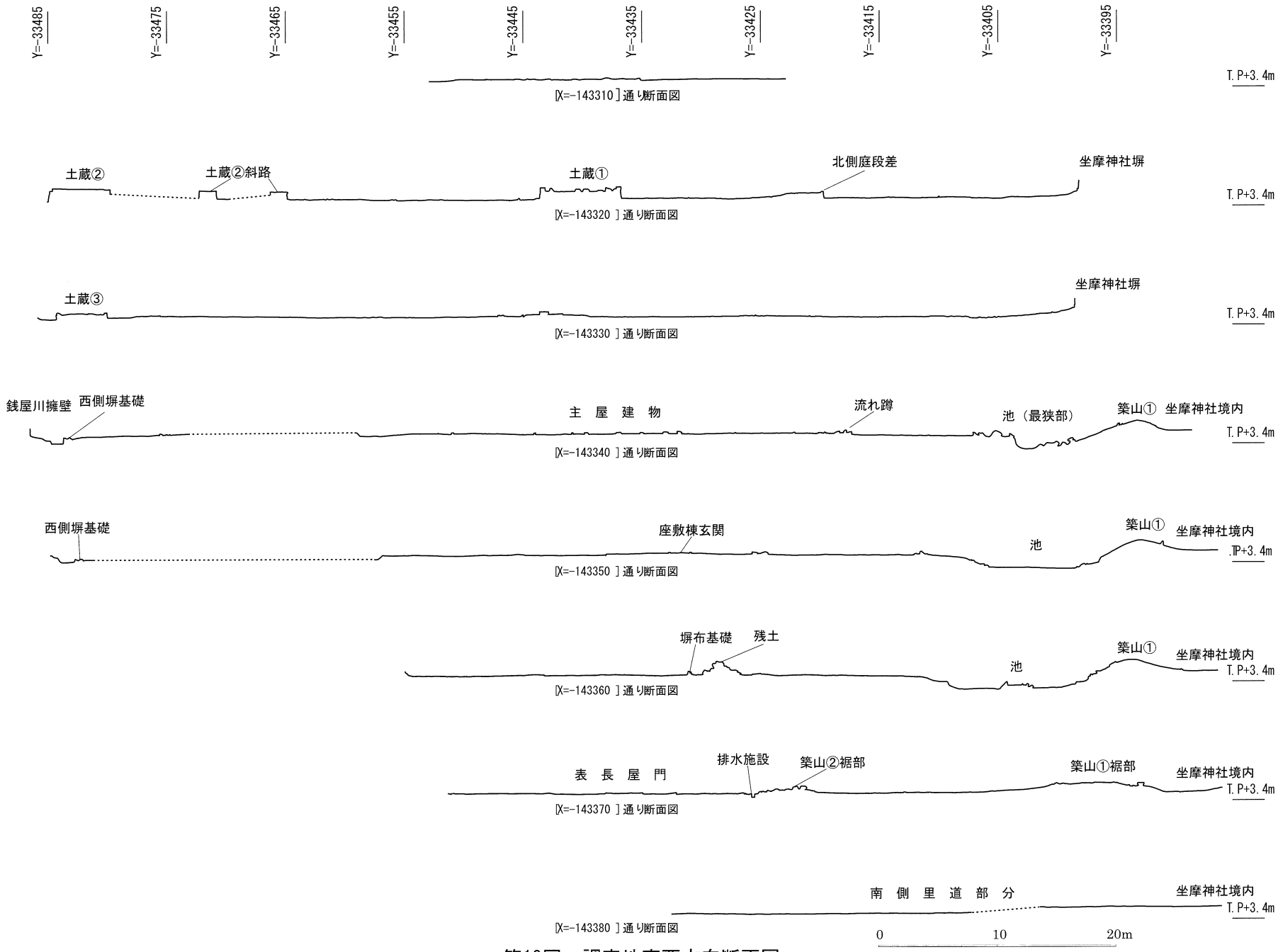
第18図　船着場平面図・立面図・断面図

周濠

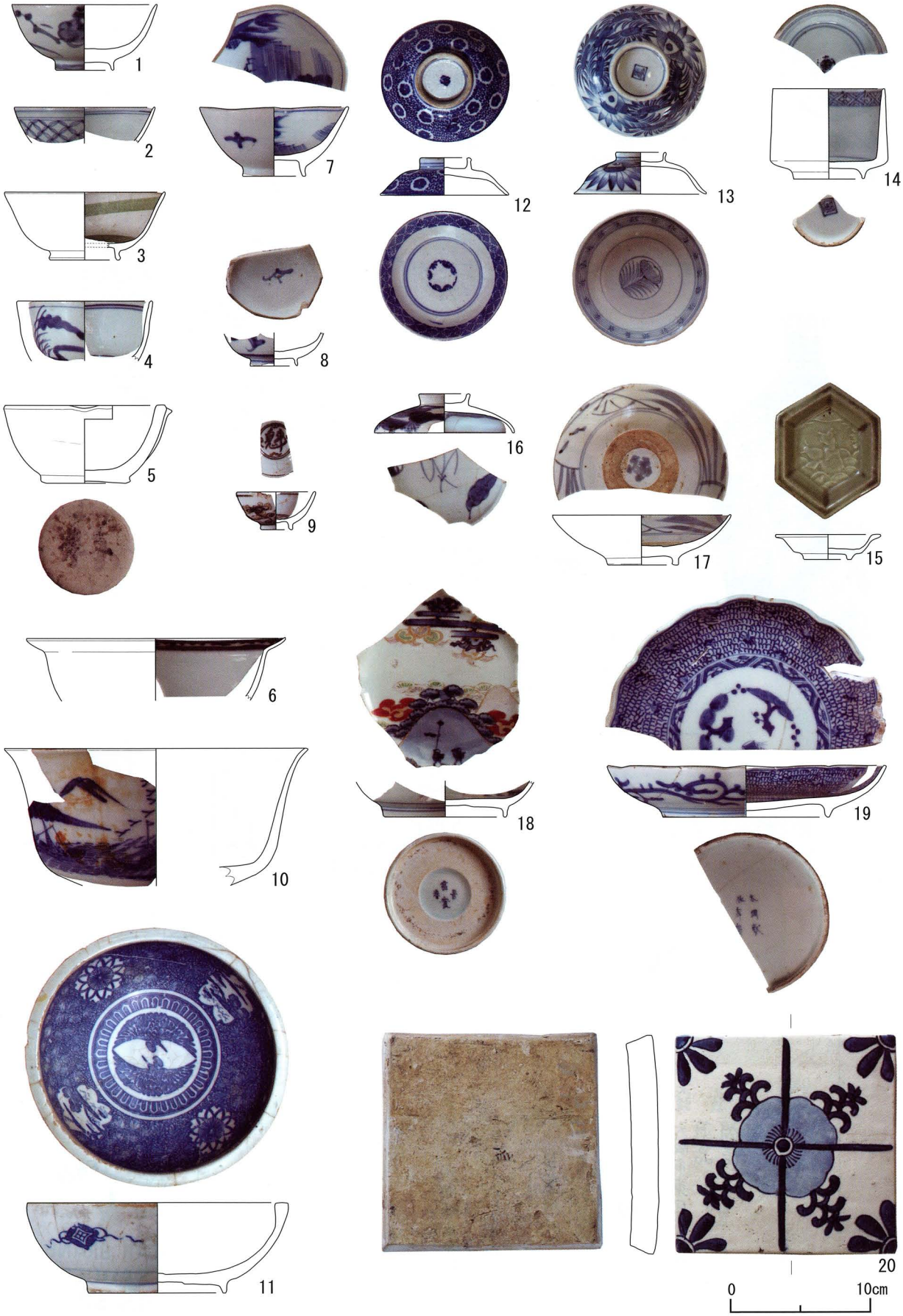
「大正７年写し絵図」によると、会所屋敷の西側は銭屋川に接しており、残る３方には濠を廻らしていたことが描かれている。北（トレンチ№１）、東（トレンチ№３）及び南（トレンチ№２）に各１箇所トレンチを設定して掘削を行った。その結果、何れの箇所でも現地表下に周濠が遺存していることを確認できた。幅は1.8m程度と推定され、板と杭による護岸が施されていることが、北（トレンチ№１）と南（トレンチ№２）の周濠で確認できた。表長屋門より西側は暗渠となっていたと考えられている。長時間掘った状態で作業できないため、今回は有無の確認に止めざるをえなかった。

舟入

ちょうど土蔵②の北側から裏長屋門北側までの間で、現況で東西方向の北側周濠がやや北に角度を変えて銭屋川に繋がっているところが認められる。大半が今回の調査対象地外になるため、発掘して確認することは出来なかったが、銭屋川までの延長25m程が幅もやや拡がっており、銭屋川と直角ではなくやや鈍角に繋がるのは下流からの船を引き込むためではないかと考え、ここに船入が設けられていたと推測している。

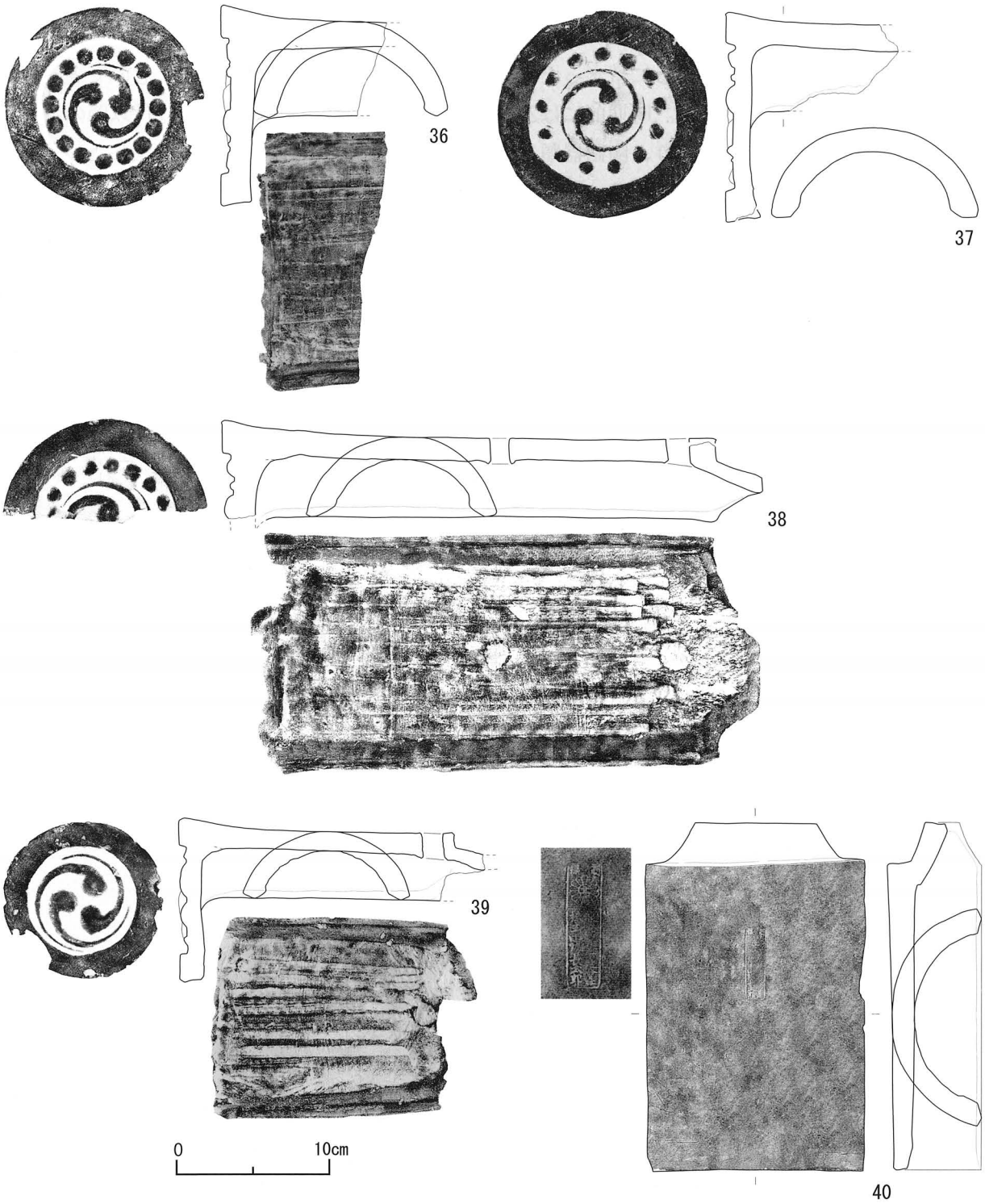


第19図　調査地東西方向断面図



第20図　国産磁器実測図(S=1/4)

第21図　国産陶器(S=1/4, S=1/3)・土製品(S=1/2)・ガラス(S=1/2, S=1/3)実測図



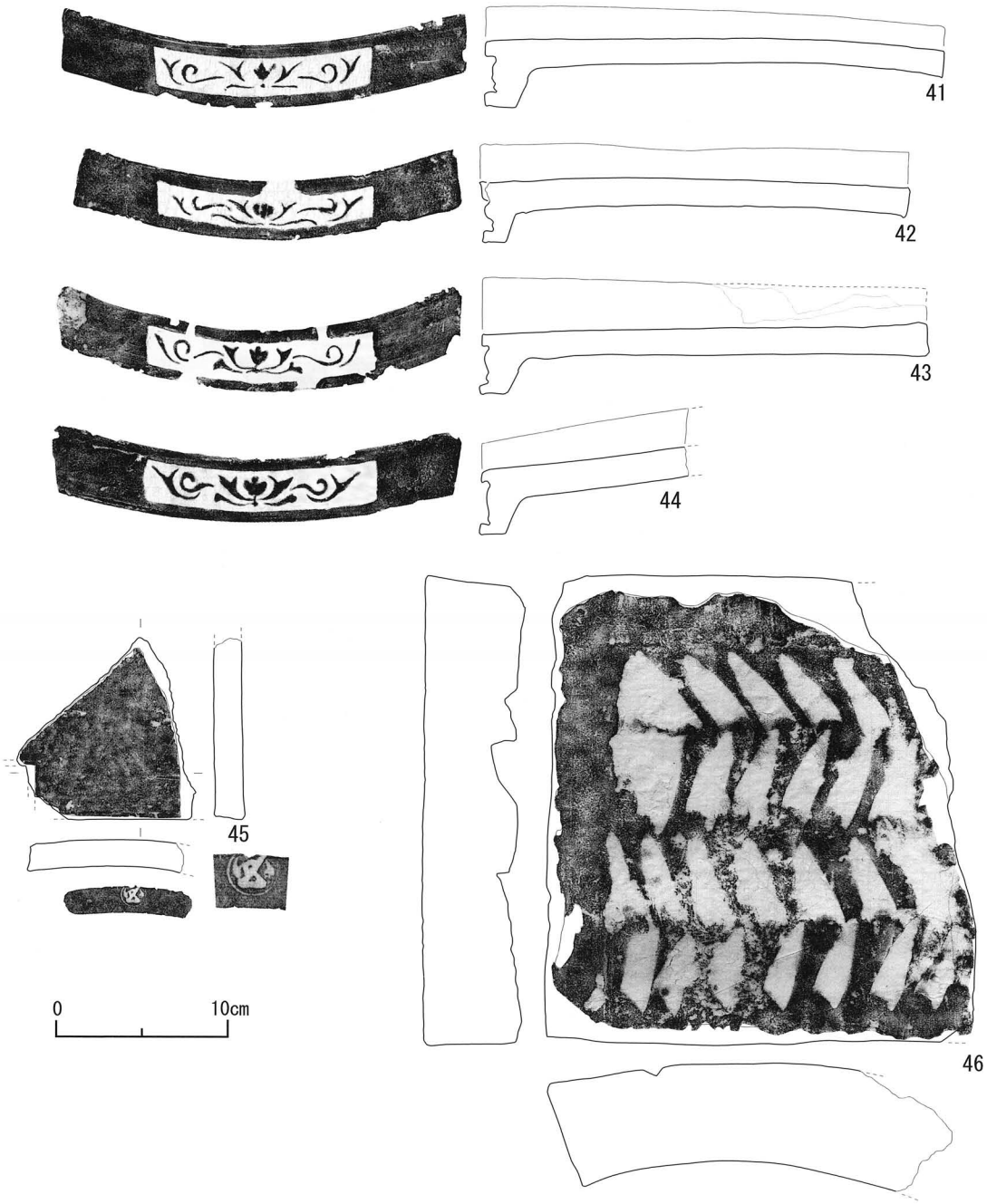
第22図　軒丸瓦・丸瓦実測図(S=1/4)

第２節　遺物

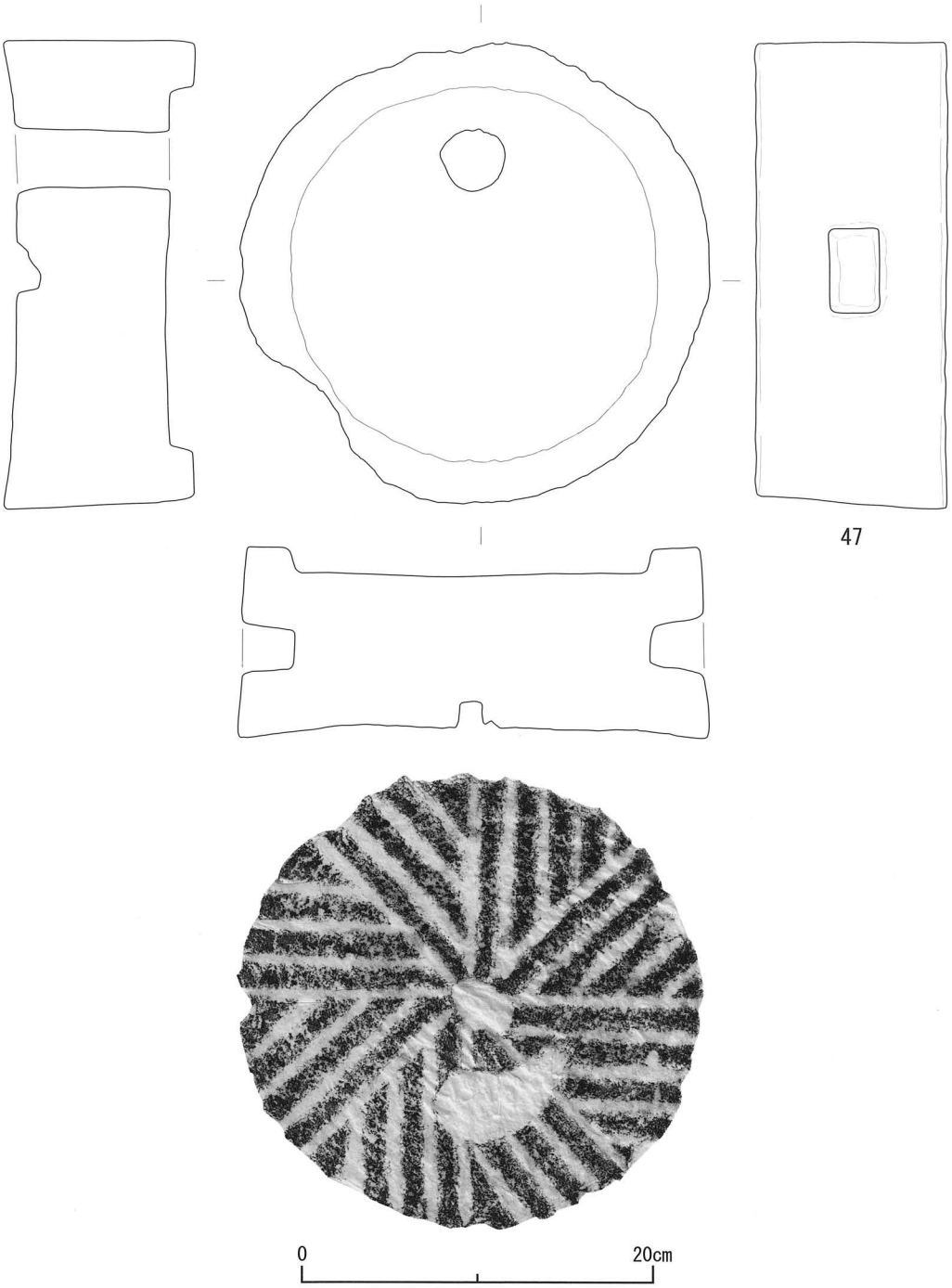
今回の調査では、表土を掘削するに留まったため、遺物には建物解体時に散乱したものや表面採集といってもよいものも含まれている。時期的には20世紀前半の新しいものもあるが、近代以降の会所の歴史を示す資料として取り上げており、陶磁器類、瓦、金属製品、木製品に分類して図化した。

陶磁器類は国産のものに限られており、染付は時期的には18世紀代から20世初頭頃のものが殆どで、17世紀代まで遡るものは無かった。

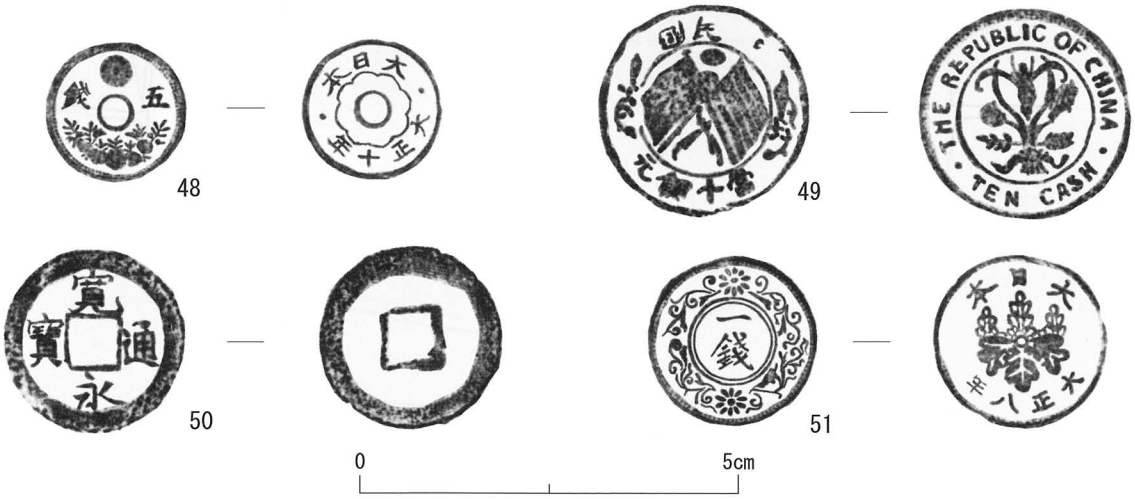
瓦については、瓦当面の文様の代表的なものを選んで図化している。各建物が桟瓦に葺き替えられる前に使用されていた本瓦である。



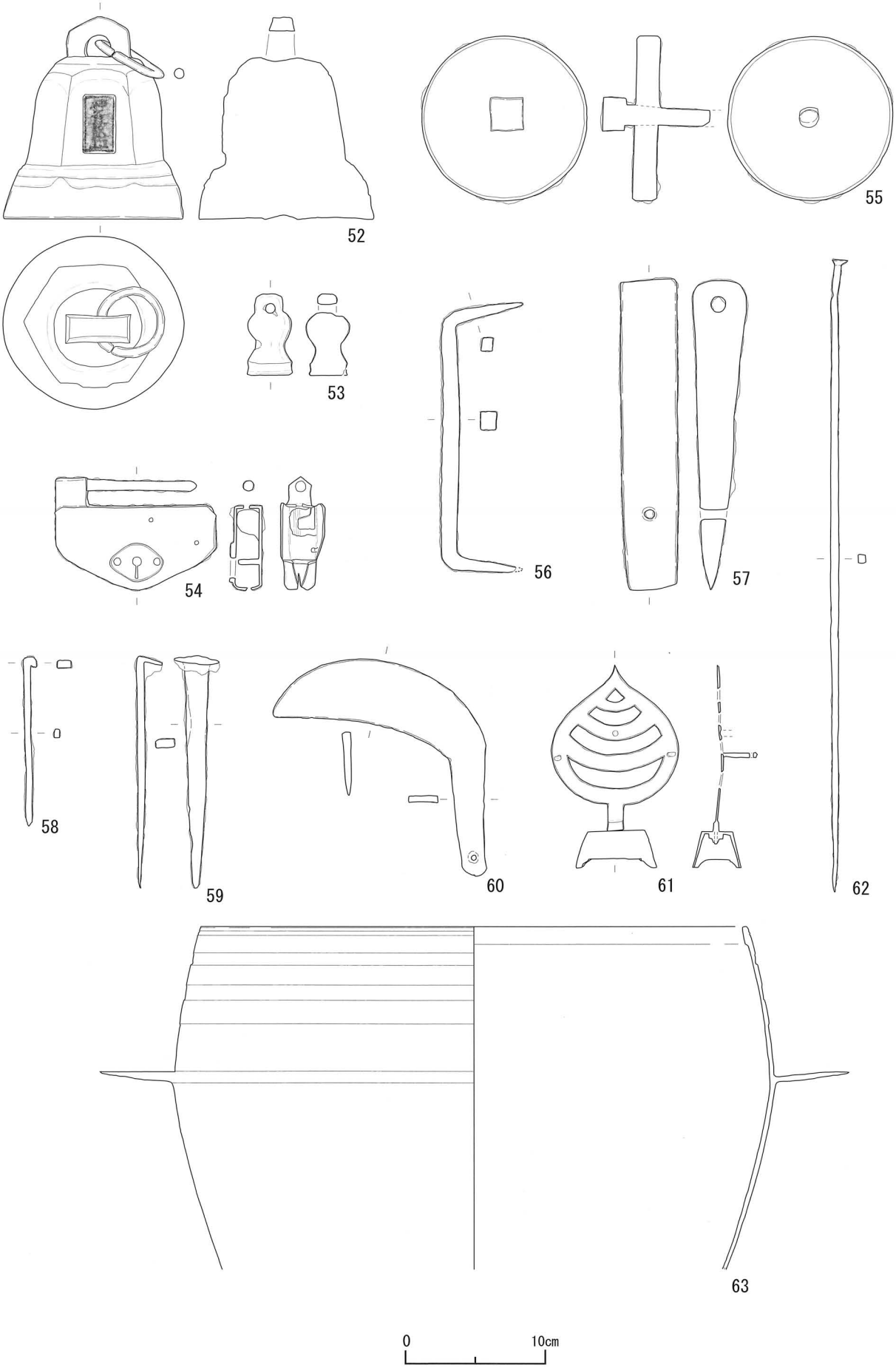
第23図　軒平瓦・平瓦・井戸瓦実測図(S=1/4)



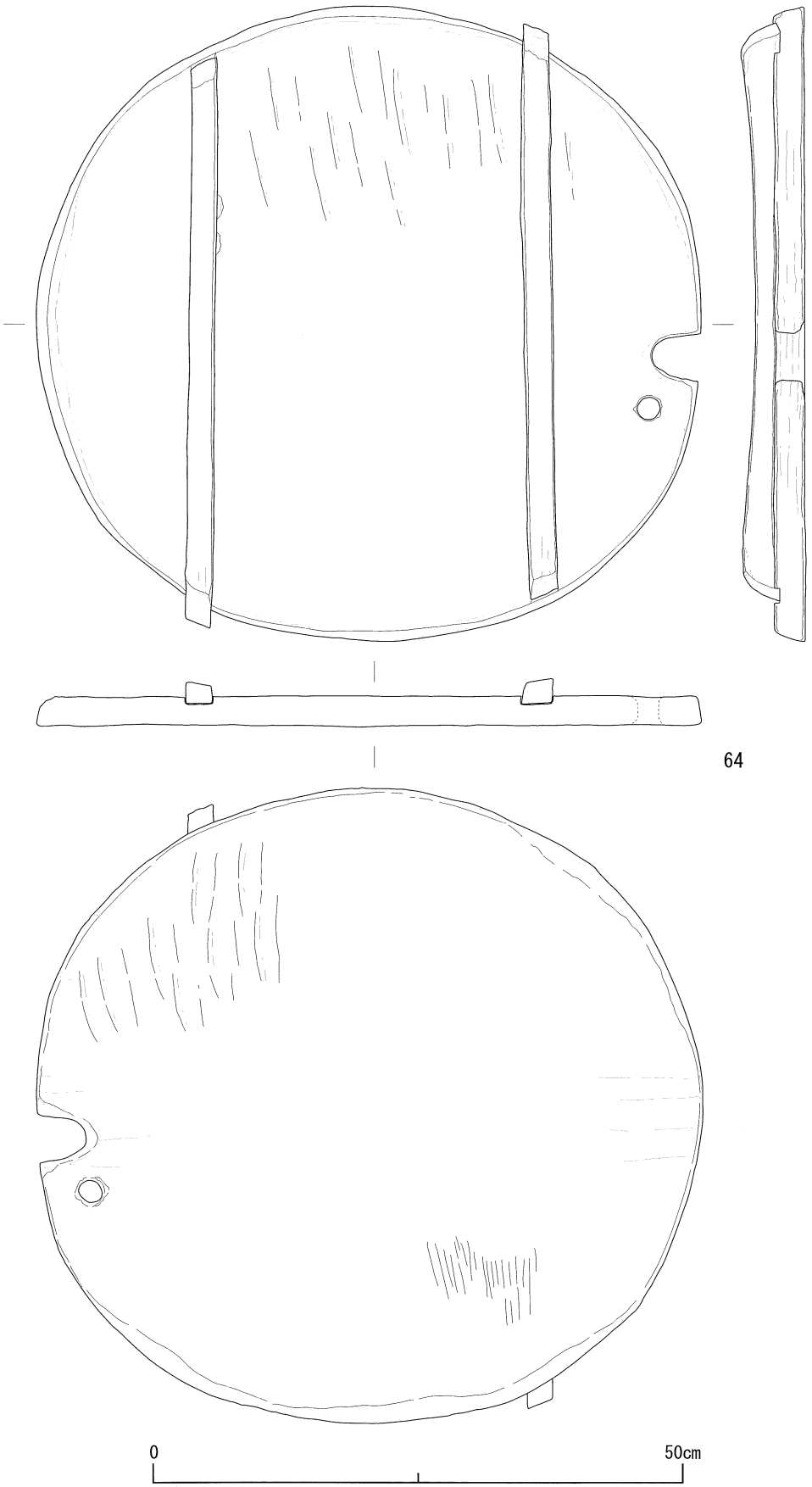
第24図　石製品実測図(S=1/4)



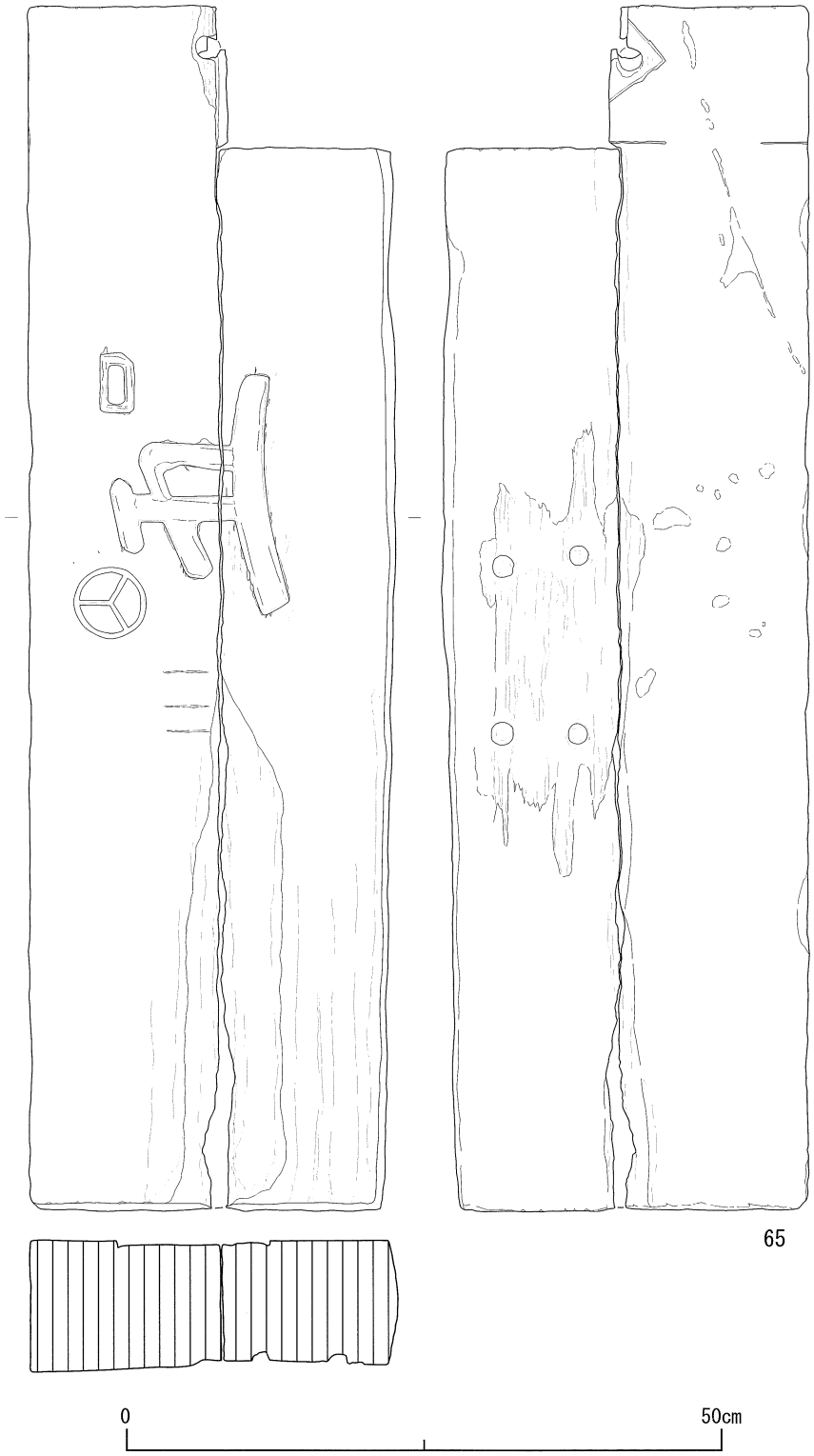
第25図　銭貨拓影(S=1/1)



第26図　金属製品実測図(S=1/4)



第27図　木製品実測(1)(S=1/6)



第28図　木製品実測図(2)(S=1/6)

表1　遺物観察表

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
1	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(10.4) 底径:4.1 器高:4.7	高台はやや「ハ」の字状にひらく。体部は丸みをもちつつ口縁部へ伸びる。口縁端部はやや尖り気味。	内:施釉、露胎(底部) 外:施釉、露胎(高台底部)	密	N8/ 灰色	口縁～体部 15%、底部完形 外面に折れ枝梅文の染付 くらわんか碗 18 世紀中頃～末の所産
2	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(10.0) 器高:(2.6)	口縁部は外上方へ伸びる。	内・外:施釉	密	5Y8/1 灰白色	口縁部 30% 外面に網目文の染付 18 世紀前半の所産
3	土蔵③ (南室)	国産磁器	染付碗	口径:(11.5) 底径:(5.0) 器高:4.9	高台はやや高い。端部は面をもつ。体部は丸みをもちつつ外上方へ伸び、口縁部へ続く。端部は丸く納める。	内・外:施釉	密	5Y8/1 灰白色	40% 内面に染付 端反碗 19 世紀後半の所産
4	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(9.6) 器高:(4.3)	口縁部はわずかに外上方へ伸びる。	内・外:施釉	密	5Y8/1 灰白色	口縁部 20% 外面に草木文(笹または竹か)の染付 広東碗か 18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産
5	庭園北 (池周辺)	国産磁器	白磁乳鉢	口径:11.5 底径:5.7 器高:5.6	底部は中央がやや窪む。体部は外上方へ伸び、口縁部へ続く。口縁端部は面をもつ。片口鉢である。	内:施釉(口縁部)、回転ナデ 外:施釉(口縁～体部、ナデ(底部)	密	2.5Y8/1 ～ 8/2 灰白色	完形 底部外面に墨書有り、「称」か 19 世紀末～ 20 世紀初頭の所産
6	裏長屋門	国産磁器	染付鉢	口径:(18.6) 器高:(4.5)	体部は丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、端部はやや尖り気味に納める。	内・外:施釉	密	N8/ 灰色	口縁～体部 20% 内面口縁部に波濤文の染付 18 世紀代の所産
7	裏長屋門	国産磁器	染付碗	口径:(10.6) 底径:(4.5) 器高:5.0	高台はやや高い。端部は面をもつ。体部は外上方へ伸び、口縁部へ続く。口縁部は五角形を呈する。端部は丸く納める。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	5Y8/1 灰白色	口縁～底部 40% 口縁部が五角形 内面に山水文の染付 外面に雁金の染付 18 世紀前半の所産
8	裏長屋門	国産磁器	染付碗	底径:(3.4) 器高:(2.4)	高台はやや「ハ」の字状にひらく。体部は丸みをもちつつ伸びる。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	高台 10% 見込に雁金の染付 外面に草花文の染付 19 世紀後半の所産
9	主屋建物西庭	国産磁器	盃	口径:(5.6) 底径:2.2 器高:2.7	高台端部は尖り気味である。体部は丸みをもち口縁部へ伸びる。端部は丸く納める。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	口縁部 20%～底部完形 見込に「魁」の銘 外面に草花文の染付 19 世紀末～ 20 世紀初頭の所産
10	主屋建物	国産磁器	染付鉢	口径:(21.8) 器高:(9.9)	体部は外上方へ伸び、口縁部は緩やかに外反する。端部は丸みをもつ。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	20% 外面に山水文の染付 19 世紀代の所産
11	土蔵①	国産磁器	染付鉢	口径:18.9 底径:9.9 器高:6.5	高台端部は面をもつ。体部は丸みをもちつつ外上方へ伸び、口縁部は直立する。端部は面をもつ。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	10YR8/1 灰白色	完形 内面に花唐草文と、花弁の窓絵内に山水文の染付 見込に鳳凰 銅版転写 19 世紀末の所産
12	土蔵①	国産磁器	染付蓋	口径:9.2 底径:3.4 器高:2.7	高台端部はやや尖り気味である。体部は丸みをもちつつ口縁部へ続く。端部は丸みをもつ。	内・外:施釉	密	2.5Y8/1 灰白色	完形 見込に花文の染付 外面にみじん唐草と小花の染付 端反碗蓋 19 世紀末の所産
13	土蔵①	国産磁器	染付蓋	口径:9.6 底径:3.6 器高:3.0	高台端部は丸く納める。体部は丸みをもちつつ口縁部へ続く。口縁部は六角形を呈する。端部はやや外反し丸みをもつ。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	完形 見込に花文の染付 外面に草花文の染付 高台に一重方形枠内に「寿」の銘 端反碗蓋 19 世紀後半の所産
14	裏長屋門	国産磁器	染付湯呑	口径:(8.0) 底径:5.0 器高:6.5	高台端部は丸く納める。体部は直立気味に伸び、口縁部へ続く。端部はやや平らである。	内・外:施釉	密	5Y8/1 灰白色	40% 見込に五弁花文 高台に一重方形枠内に解読不能の銘 18 世紀後半の所産
15	裏長屋門	国産磁器	六角小皿	口径:7.4～9.9 底径:3.3～5.2 器高:1.8	高台端部は平らである。口縁部は外反し、口縁端部は面をもつ。口縁・高台部は六角形を呈する。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	深緑(釉)	完形 内面に絵 三田青磁 19 世紀代の所産

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
16	表長屋門	国産磁器	染付蓋	口径:(10.0) 底径:(3.5) 器高:2.8	高台端部は丸く納める。体部は丸みをもちつつ口縁部へ続く。端部はやや平らである。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	40% 内面に木の葉の染付 内面中央に抽象化した文字の染付か 外面に草木文(松か)の染付 広東碗蓋 19 世紀前半の所産
17	土蔵② (中室)	国産磁器	染付丸皿	口径:12.8 底径:5.0 器高:3.6	高台は直立する。体部は外上方へ伸びる。口縁端部は丸みをもつ。	内:施釉、露胎(底部の一部) 外:施釉、露胎(高台底部)	密	5Y8/1 灰白色	60% 内面に草木文の染付 見込に五弁花文のコンニャク印判 内面は釉剝ぎ法により蛇の目状を呈する 18 世紀後半の所産
18	主屋建物西庭	国産磁器	染付皿	底径:8.8 器高:(2.6)	高台端部は面をもつ。体部は丸みをもちつつ伸びる。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	2.5Y8/1 灰白色	底部完形 内面に色絵山水図の染付 高台に「富貴長春」の銘 蛇の目凹形高台 伊万里焼 19 世紀前半の所産
19	主屋建物	国産磁器	染付皿	口径:(19.8) 底径:(12.0) 器高:3.7	高台端部は丸みをもつ。体部は外上方へ伸び、口縁部はやや直立気味である。端部は丸みをもつ。	内:施釉 外:施釉、露胎(高台底部)	密	5Y8/1 灰白色	口縁～底部 50% 口縁の形態は輪花 内面にみじん唐草と小花の染付 見込に松竹梅円形文の染付か 外面に連続唐草文の染付 高台に「太明成化年製」の銘 肥前磁器 18 世紀前半の所産
20	表長屋門 (居宅部分)	国産磁器	タイル	長:15.8 幅:15.9 厚:2.0	正方形。	内:露胎、ナデ、釉(僅かにかかる) 外:施釉	密	10YR8/3 浅黄橙色	完形 内面に判読不能の墨書あり(薄く残る) 外面に草花文の染付 瀬戸系か 19 世紀末～ 20 世紀初頭の所産
21	主屋建物	国産陶器	蓋	口径:6.0 最大径:8.4 つまみ径:1.8 器高:3.4	乳頭状のつまみをもつ笠形。	内:回転ナデ 外:施釉	密	10YR7/3 にぶい黄橙色	ほぼ完形 外面に茶褐色の釉で草花文を描く 19 世紀代の所産
22	表長屋門	国産陶器	水瓶	口径:(38.0) 器高:(11.9)	体部は丸みをもちつつ口縁部へ続く。口縁部は短く直立気味に伸びる。端部は内傾し面をもつ。	内・外:回転ナデ	1㎜前後の長石・雲母	内: 2.5YR4/2 灰赤色 外: 10R4/3 赤褐色	口縁部 10%以下 備前焼 茶道具 耳環付(1 箇所残)
23	土蔵①	国産陶器	茶壷	口径:(8.8) 器高:(3.8)	短い口縁部。口縁端部は玉縁状。肩部を意識的にひずませている。	内・外:回転ナデ	1～2㎜の長石	7.5YR4/2 灰褐色	口縁～肩部 30% 釉が所々に残る 四耳壷(耳 1 箇所残) 信楽焼
24	庭園北 (池周辺)	国産陶器	灯明皿	口径:(11.4) 底径:5.0 器高:2.1	底部は中央がやや窪む。体部は外上方へ伸び、口縁部へ続く。口縁端部は面をもつ。	内:施釉 外:回転ナデ	密	2.5Y6/1 黄灰色 釉:淡緑黄色	15% 内面に施釉 信楽焼 19 世紀代の所産
25	主屋建物北庭 (石碑付近)	土師質土器	椀	底径:3.8 器高:(2.8)	高台端部は面をもつ。体部は丸みをもちつつ外上方へ伸びる。	内・外:ナデ	1㎜以下の長石	7.5YR7/4 にぶい橙色	底部完形 白色塗料を全面に塗布 焼成やや軟質 外面が全体に剥離する
26	土蔵④	土師質土器	盤?	口径:22.0 底径:22.6 器高:1.2	底部は平らである。口縁端部は丸みをもつ。	内:施釉 外:ナデ	1㎜前後の長石	10YR7/4 にぶい黄橙色 釉:緑色	40% 内面に緑釉を施す
27	土蔵④	土師質土器	灯明皿	口径:(5.6) 底径:(4.4) 器高:0.9	平底から口縁部は短く外上方へ伸びる。端部は面をもつ。	内:回転ナデ、施釉 外:回転ナデ、糸切り痕(底部)	密	7.5YR8/4 浅黄橙色	30% 内面に柿釉を施す 19 世紀代の所産
28	–	瓦質土器	鍋	口径:(34.1) 器高:(8.8)	体部は外上方へ伸びる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く納める。	内:ナデ 外:ユビナデ	1㎜以下の長石	N4/ 灰色	口縁部 10%以下 口縁部内面に把手?の痕跡有り
29	主屋建物	漆器	酒器?	口径:6.4 器高:(3.6)	体部は丸みをもつ。口縁部はやや尖り気味に納める。	内・外:漆	–	5YR1.7/1 黒色	60%
30	–	国産陶器	通い徳利	口径:3.6 底径:9.4 器高:25.0	底部は中央が窪む。体部は上方へ伸び、頸部で内上方へ伸びる。口縁部は直立する。口縁端部は外側へ肥厚する。	内・外:回転ナデ	1㎜前後の長石	7.5YR3/3 暗褐色	口縁・底部完形、体部 80% 白釉で「小松原」を描く 信楽焼か 19 世紀末～ 20 世紀初頭の所産

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
31	土蔵① (西側排水溝)	国産陶器	茶入れ	口径:(3.0) 底径:3.3 器高:5.2	底部は中央がやや窪む。体部は上方へ伸び、肩部で内上方へ伸びる。口縁部は短く直立する。口縁端部はわずかに外反する。	内:回転ナデ 外:施釉、回転ナデ、糸切り痕(底部)	密	2.5Y7/2 灰黄色 釉:淡緑灰色	70% 刻印(文字不詳)あり 茶道具 耳付き(1箇所残)
32	土蔵①	土製品	塔	器高:(3.1) 厚:1.1 ～ 1.8	底面には円形の穿孔がみられるが、貫通はしない。	ナデ	1mm以下の長石・石英・雲母	7.5YR7/4 にぶい橙色	70%(三重まで屋根が残る)
33	土蔵④	ガラス	小型瓶	口径:1.1 底径:1.3 器高:5.5	方形を呈する。口縁部は水平でない。	–	–	濃紺色	完形 薬瓶 体部二面に文字有り(「横山製薬」、「イボコロリ」)
34	主屋建物西庭	ガラス	瓶	口径:2.1 底径:5.7 器高:19.1	円形を呈する。口縁部は凸帯状にふくらむ。底部は高台から平面を呈する。	–	–	淡青緑色	薬瓶 体部に文字有り「大阪府下西成郡今宮町、浦野製薬今宮工場、登録　商標、?薬用外、二硫化炭素、劇物、百廿匁入、發賣元、大阪市東区伏見町、薬品問屋浦野商店」
35	土蔵④	ガラス	瓶	口径:2.3 底径:5.0 器高:19.5	円形を呈する。口縁部は凸帯状にふくらむ。底部は高台からやや凸状を呈する。	–	–	淡青緑色	ソース瓶 体部に文字有り「REGISTERED、TRADE　★(星マーク)　MARK、STAR BRAND SAUCE I.S.&SON」
36	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:13.2 長:(10.9) 厚:2.0	瓦当は左巴文の周囲を16個の珠文が巡る。	凹:ナデ、布目圧痕 凸:ミガキ	1mm前後の長石・雲母	N5/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
37	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:13.7 長:(11.3) 厚:1.7	瓦当は左巴文の周囲を13個の珠文が巡る。	凹:ナデ、ユビナデ 凸:ナデ	1mm前後の長石・雲母	N5/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
38	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:(13.8) 長:35.4 厚:1.5	瓦当は左巴文の周囲を18個(復元)の珠文が巡る。丸瓦部に釘孔2箇所有り。玉縁式である。	凹:ナデ、ユビオサエ、布目圧痕のちヘラ状工具によるナデ 凸:ミガキ	1mm前後の長石・雲母	N4/～3/ 灰～暗灰色	瓦当面40%、丸瓦部完形 18世紀以降の所産
39	土蔵③ (南室)	瓦	巴文軒丸瓦	瓦当径:10.4 長:20.0 厚:1.2	瓦当は左巴文。丸瓦部に釘孔1箇所有り。玉縁式である。	凹:ナデ、布目圧痕のちヘラ状工具によるナデ 凸:ミガキ	1mm前後の長石・雲母	N4/～5/ 灰色	90% 18世紀以降の所産
40	土蔵③ (南室)	瓦	丸瓦	長:22.7 狭端幅:8.0 広端幅:14.2 厚:1.5	玉縁式である。	凹:棒状工具によるナデ 凸:ナデ	1mm以下の長石・雲母	N3/暗灰色	ほぼ完形 凸面に刻印あり(菊文と、「株主山吹?長太郎　■■■■■■社」(■は文字不明) 19世紀以降の所産
41	土蔵④	瓦	唐草文軒平瓦	長:27.8 瓦当面幅:23.9 狭端部幅:22.9 厚:1.4 ～ 4.0	瓦当面はいわゆる橘唐草文である。果実の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。顎部は段顎である。	凹・凸:ナデ	1mm以下の長石・雲母	N5/～4/ 灰色	完形 18世紀以降の所産
42	土蔵④	瓦	唐草文軒平瓦	長:25.1 瓦当面幅:22.3 狭端部幅:21.4 厚:1.5 ～ 3.5	瓦当面はいわゆる橘唐草文である。果実は花弁が分離している。顎部は段顎である。	凹・凸:ナデ	1mm以下の長石・雲母	N5/～4/ 灰色	完形 18世紀以降の所産
43	土蔵② (中室)	瓦	唐草文軒平瓦	長:26.2 瓦当面幅:23.0 狭端部幅:(19.8) 厚:1.5 ～ 3.5	瓦当面はいわゆる橘唐草文である。果実の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。顎部は段顎である。	凹・凸:ナデ	1mm前後の長石・雲母	N5/～4/ 灰色	90% 18世紀以降の所産
44	土蔵③ (南室)	瓦	唐草文軒平瓦	長:(12.2) 瓦当面幅:23.9 厚:1.8 ～ 3.9	瓦当面はいわゆる橘唐草文である。果実の上部は先端が3つに分かれ、下辺に珠点がある。顎部は段顎である。	凹:ナデ 凸:ユビオサエ	1mm以下の長石・雲母	N5/～4/ 灰色	瓦当面完形 18世紀以降の所産
45	裏長屋門	瓦	平瓦	長:(10.6) 幅:(9.7) 厚:1.5 ～ 1.7	–	凹・凸:ナデ	1mm以下の長石・雲母	N5/～4/ 灰色	破片 端面に刻印あり(直径1.5cmの円に「8」に似た文様)
46	–	瓦	井戸瓦	長:27.5 幅:(25.6) 厚:3.9 ～ 6.0	凸面に三角形の刻印を4列施す。	内:ナデ 外:ナデ、刻印	1mm前後の長石・雲母	N3/ 暗灰色	一端辺欠損
47	表長屋門	石製品	石臼	径:26.8 器高:10.9	裏面の擂り目は6条・8分割。側面にホゾ穴が2箇所みられる。	–	–	–	完形 上臼

	出土地点	種類	器種	計測値(cm)	形態	技法	胎土	色調	残存率・備考
48	主屋建物	銅銭	五銭硬貨	径:1.9 円孔径:0.4 重:2.58(g)	−	−	−	−	「五銭」/「大日本　　大正十年」
49	主屋建物	銅銭	中国硬貨	径:2.8 重:6.38(g)	−	−	−	−	「THE REPUBRIC OF CHINA TEN CASH」/「中■(華)民国當十■元」(■は文字不明)
50	主屋建物	銅銭	寛永通宝	径:2.4 方形孔:0.65(辺) 重:3.18(g)	−	−	−	−	「寛永通寶」
51	土蔵①	銅銭	一銭硬貨	径:2.3 重:3.54(g)	−	−	−	−	「一錢」/「大日本　　大正八年」
52	主屋建物	金属製品	分銅	器高:14.5 幅:12.9 重:5700.0(g)	釣鐘形。	−	−	−	完形 5700g:1.52 貫 約 1.5 貫の分銅か 鉄製品
53	土蔵①	金属製品	分銅	長:5.9 幅:3.2 厚:3.1 重:197.46(g)	瓢箪形。	−	−	−	完形 197.46g:52.656 匁 約 50 匁の分銅か 鉄製品
54	土蔵② (東室)	金属製品	錠	長:8.2 幅:11.5 厚:0.2 ～ 0.4 重:320.38(g)	−	−	−	−	完形 鉄製品
55	土蔵② (中室)	金属製品	滑車	径:11.8 厚:1.8 重:1505.0(g)	円形。ボルトを軸とする。	−	−	−	ほぼ完形 扉部材か 鉄製品
56	−	金属製品	鎹	長:19.4 幅:8.0 厚:0.3 ～ 1.4 重:221.56(g)	両端が「L」字状に曲がる。断面は方形である。	−	−	−	ほぼ完形 鉄製品
57	−	金属製品	扉部材	長:22.4 幅:4.2 厚:0.2 ～ 3.9 重:1510.0(g)	クサビ型。	−	−	−	完形 鉄製品
58	−	金属製品	釘	長:12.1 幅:0.4 ～ 0.9 厚:0.6 重:16.85(g)	頭部は肥厚する。断面は方形である。	−	−	−	完形 鉄製品
59	−	金属製品	釘	長:16.6 幅:0.4 ～ 3.2 厚:0.1 ～ 0.5 重:83.47(g)	頭部は「L」字状に曲がる。断面は長方形である。	−	−	−	完形 鉄製品
60	裏長屋門	金属製品	鎌	長:15.5 幅:15.3 厚:0.1 ～ 0.6 重:216.93(g)	−	−	−	−	完形 鉄製品
61	土蔵②	金属製品	飾金具	長:14.5 幅:9.1 厚:0.1 ～ 0.3 重:158.72(g)	火炎型。	−	−	−	完形 金銅製品
62	土蔵①	金属製品	火箸	長:50.3 厚:0.1 ～ 1.1 重:60.2(g)	頭部は肥厚する。断面は方形である。	−	−	−	完形 鉄製品
63	主屋建物	金属製品	鉄釜	口径:(39.0) 鍔径:(50.0) 器高:(24.5) 重:1295.0(g)	体部は球形を呈する。鍔はわずかに上方へ伸びる。口縁部は内面に肥厚する。	−	−	−	口縁～体部 20% 鉄製品
64	−	木製品	蓋	径:60.0 ～ 63.0 厚:2.8 ～ 3.0	表側にははめ込み式の把手が 2 本ある。内外面ともに使用痕はみられない。	−	−	−	完形
65	−	木製品	樋門 落し板	長:116.0 幅:15.6 厚:9.9 ～ 11.0	表面には「五」、「ロ」、「○の中に人」の加工がみられ、文字内とその周囲、裏面にも墨が付着している。裏面には 4 箇所の円孔があるが、貫通はしない。 一端には釘孔が貫通する。裏面には釘に付属した菱形の金具痕がみられる。また、二次加工痕である鋸痕がみられ、釘孔の端が切り取られている。	−	−	−	ほぼ完形

第５章　まとめ

今回の確認調査では、各建物の礎石を始め、庭園、船着場等の遺構が予想以上に良好な状態で遺存していることが確認され、以下のことを確認することができた。

①各建物の礎石の検出状況から、主屋棟、座敷棟、蔵等の建物、特に裏長屋門については下層に重複する礎石を検出しており、前身建物の基礎と考えられ、複数回の建て替え、改築が行われていることが推定される。

②各建物の礎石、特に主屋建物のそれには柱座を２～３回削り込んでいるものがあり、また、墨線や柱座の向きが最後の建物の軸線と一致しないものもあることから、複数回の建て替えの度に再利用され、その中には会所創建時のものが遺存している可能性が考えられる。

③今回の調査では解体直前には確認できなかった「大正７年写し絵図」に描かれている以下の建物配置及び関連遺構を確認することができた。

- 表長屋門に付属していた居宅部分の礎石の検出
- 銭屋川に面した船着場の石段
- 土蔵④(道具蔵？)の基礎の検出
- 裏長屋門東隅から延びる高塀基礎の検出
- 池は縁石が明確に遺存しており、形状が判明
- 敷地を囲む周濠のうち現状では埋没していた東側周濠の確認
- 表長屋門正面西側にも濠があったことが確認
- 主屋棟西側に付属する建物の礎石の検出

④絵図には描かれていなかったもの。

- 座敷棟から池へつながる流れ蹲の検出
- 敷地西側の銭屋川に面して設けられていた高塀基礎の検出
- 第４章第１節では触れなかったが、坐摩神社西側、池北側の庭園北の空間地において石積みが２箇所検出(今のところ何のためのものか不明であるが、神社と関係するものと推定している)

⑤庭園の遺存状況は良好で、その特徴から近世末から近代にかけて作庭されたものと考えられるが、池については下段の縁石に積み方の異なるものが確認されており、庭園そのものの時期を新しくするものではなく、作庭時期はさらに遡るものと考えられる。

また、築山の東側は坐摩神社の境内となっており、築山が築かれた時期が、神社が地元の氏神として開放された時期と重なると考えられるが、それについては不明である。

座敷から眺めを想像すると、借景としての生駒山系と築山①の形状が相似形のようであり、また、築山②は遠景としてある二上山系・金剛葛城山系に重なる様であるが、想像の域を出ない。さらに強いて言及するならば、池の形状は新田開発前の深野池を意識しているのではないかと推測するが、これについても確たる根拠は無い。

以上、今回の調査結果から平野屋新田会所跡の現状の評価について簡単に記述する。

大和川付け替えによる一連の新田開発は、大阪平野の広範囲に及び、幕府が実施した開発工事の成功例として歴史的に重要な意味を持つと同時に、そのうちのひとつである深野池の新田開発は、本市の基盤を築いた意味において歴史的に大きな位置と役割を占めているといえる。

新田開発時に設置された会所については、敷地と建物が現存しているのは鴻池新田会所(東大阪市)、加賀屋新田会所(大阪市)、安中新田会所(八尾市)の３箇所に過ぎない。これら３箇所は国の史跡指定や

表２　新田会所対照表

会所		平野屋新田会所	鴻池新田会所	加賀屋新田会所
面積（㎡）		6,800	15462（現存 10,662）	7,500（現存 4,821）
表長屋門（㎡）		112.5	48.0	137.0
冠木門		×	○	○
裏長屋門（㎡）		48.0	71.6	×
主屋部（㎡）		326.2	287.5	73.3
座敷部（㎡）		112.4	98.0	70.5
居宅（㎡）		△	103.8	55.9
土蔵	棟数・面積計	4 棟（245.4）	5 棟（475.5）	1 棟（45.0）
	名称・規模（㎡）	屋敷蔵（37.4）	屋敷蔵（36.5）	土蔵（45.0）
		米蔵（132.0）	米蔵（237.1）	－
		道具蔵（46.0）	道具蔵（103.4）	－
		土蔵（30）	文書蔵（28.9）	－
		－	乾蔵（69.6）	－
庭園	形式	池泉回遊式／築山式庭園	池泉回遊式／平庭式庭園	池泉回遊式／築山式庭園
	面積（㎡）	2,000	2,600	2500（現存）
	借景	生駒山	生駒山	大阪湾
	施設	流れ蹲（？）、灯篭	蹲、灯篭	茶室風建物（明霞亭）、町屋 (偶然亭)、蹲、灯篭
	樹木	クスノキ、ムクノキ、アラカシ、イヌガヤ、モミジ、イチョウ、モチノキ？、フジ、アカメガシワ等	クスノキ、エノキ、ムクノキ、アラカシ、イヌガヤ、スギ、ヒノキ、モミジ、イスノキ、ヤマモモ、モチノキ、フジ等	クスノキ、エノキ、アラカシ、イヌガヤ、マツ、ソテツ、センダン、モミジ、イチョウ、カイヅキブキ等
神社		坐摩神社	朝日社	×
土塀		△	○	△
濠		○	○	△
船着き場		○	○	×
その他施設		×	火の見小屋、白洲	中門
役宅		×	○	×
新田名		深野南新田・河内屋南新田	鴻池新田	加賀屋新田
開発地		深野池床	新開池床	旧大和川河口干潟
規模	反別	74 町 1 畝 6 歩(享保 4 年)	157 町 8 反 8 畝(享保 4 年)	105 町 3 反 8 畝（天保末年）
	石高	834 石 6 斗 3 升 8 合（享保 4 年）	1706 石 8 斗 8 升（享保 4 年）	？

市指定文化財等に指定され、保存と活用がなされている。平野屋新田会所も同様に保存され、市民に開放し、新田開発の歴史を後世に伝える文化財として活用されるはずであったが、今日の状況に至った経過は第２章で記述したとおりである。新田開発に伴い建造され、今日まで同じ歴史を歩んできたはずであるが、取り巻く状況が違えば、結果は異なってしまうという、保存の難しさを改めて認識している。

しかしながら、今回短期間ながら会所について考古学的調査ができたことは、大きな意味がある。

おそらく敷地全体を対象に考古学的調査を実施した最初の例ではないかと考えられ、得られた成果に加え、まだ現地には、他の会所の様相を解明するうえでも有意義な情報がまだ内包されており、今回の成果は、そのほんの１部が確認できたに過ぎない。

今回は、調査が礎石の下部までに及んでおらず、主屋建物等の土台となる地業についても不明な点が多く、もともと池であった地盤の悪い土地に、どのようにして敷地を選定して、建物を建てていったのかを解明することが今後の課題である。そのためには、既存の文献等からの資料調査が必要で、解体時に回収した民俗資料や文書の整理を行っていくことが重要であると考える。

今後は多方面からのアプローチが必要と考えており、今回の報告書は最終報告ではなく、概要としているのも、将来的には総合的な学術報告書の刊行が必要であるとの考えからである。

最後に、今回の調査にあたっては現場での３Ｄ測量、また、シンポジウムにおいてもその成果について講演をしていただいた土橋正彦氏が平成21年盛夏の頃、急逝されました。平野屋会所は、大東市のこれからのまちづくりに生かしていくべき貴重な文化財であると、その保存と活用に期待をされていましたが、早すぎる逝去に驚くばかりです。謹んで氏のご冥福をお祈り申し上げます。

註

（１）梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986青木書店

（２）大和川付け替えまで流れていた玉串川、久宝寺川、平野川等の前身である諸河川。

（３）清少納言『枕草子』の中に記述がある。

（４）『藤原康高譲状案』河内水走家文書・鎌倉遺文十ノ七四四五

（５）昭和51年に国史跡、本屋、屋敷蔵等の建物は昭和55年に国の重要文化財に指定されている。

（６）当時平野屋又右衛門は十人両替の一人であった。

（７）大東市史編纂史料目録第２集『平野屋会所文書目録』2005大東市教育委員会
平野屋会所において継承されていた古文書群で、何らかの理由で流出したものを平成12年に大東市が取得している。近世から近現代に至る古文書・古記録・書類等から成り、文書中最も古いものは宝永五年(1708)から記された河内屋南新田年貢の『御定之写』である。

（８）大阪市内(中央区九太郎町４丁目)にある坐摩(いかすり)神社から分祀された。

（９）助松屋忠兵衛も十人両替の１人。

(10)大坂堂島船大工町天王寺屋源助。

(11)白粉製造業を家業とする豪商、両替商も営んでいた。銭屋長左衛門は柏村新田(八尾市)とその会所も所有していた記録がある。

(12)大東市文化財調査報告『旧平野屋新田会所屋敷と建物』2002大東市教育委員会

(13)建物配置や庭園の形態は解体直前と大きく変化していないが、坐摩神社とその境内は屋敷地から分離していない状態で描かれている。現在、この写し絵図については、所在が不明であるとのことである。

(14)明治廿五壬辰年　　地主　高松長左衛門
上棟　　大阪新田方兼
拾弐月廿五日　　営繕掛　　高橋木兵衛

当新田住

仝　補助　　垣部房五郎

諸福村

大工棟梁　　木中久吉

(15)享保拾年巳三月朔日　　出入方手伝人足

畏て建之　　喜八内兵

地主　　藤吉郎太平

上棟　　高松長左衛門　　メ四人

他二多数人足

来ル事

当新田住支配人

植村　房五郎

支配人伜　吉太郎

明治弐拾六年　　大工長男

癸巳弐月廿五月(日？)修繕ス　諸福村大工棟梁　木中庄太郎

木中　久吉

松本　仙助

辻本　豊吉

(16)解体時の１～２月には水が無い状態であった。

参考文献

『大東市史』1973大東市教育委員会

『近世大東の新田開発』1990大東市立歴史民俗資料館

中好幸『改流ノート』1992天理時報社

中九兵衛『甚兵衛と大和川』2004大坂書籍

『重要文化財旧鴻池新田会所　史跡鴻池新田会所跡修理工事報告書』1996東大阪市

日本民俗建築学会編『図説民俗建築大辞典』2001柏書房

江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』2001柏書房

秋山高志他共編『図録農民生活史辞典』1979柏書房

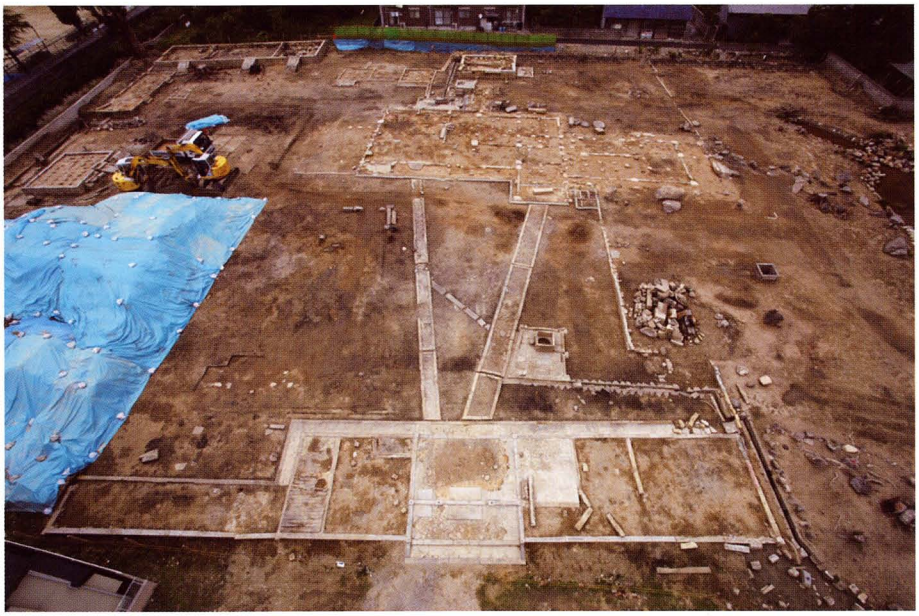
尾上孝一『図解木造建築入門』1979井上書院

上原敬二『築山・池泉の小庭（小庭のつくり方叢書第３巻)』2005加島書店

図　版

図版一　会所全景

調査区全景（西より）



調査区全景（南より）

調査区東半部（北より）

図版二　主屋建物(1)

主屋建物礎石（東より）

主屋建物礎石（西より）

主屋棟西側礎石（南より）

図版三　主屋建物(2)

主屋建物南側礎石
（西より）

主屋棟西側礎石
（南東より）

座敷棟東側縁側礎石
（南より）

図版四　主屋建物(3)

主屋棟土間入口（東より）

主屋棟土間入口（南より）

主屋棟土間・竈跡（西より）

座敷棟南側縁側・沓脱石（南より）

図版五　主屋建物(4)

座敷棟玄関（南より）

座敷棟玄関（南より）

座敷棟玄関埋甕（南東より）

座敷棟玄関埋鉢（南東より）

図版六　表長屋門

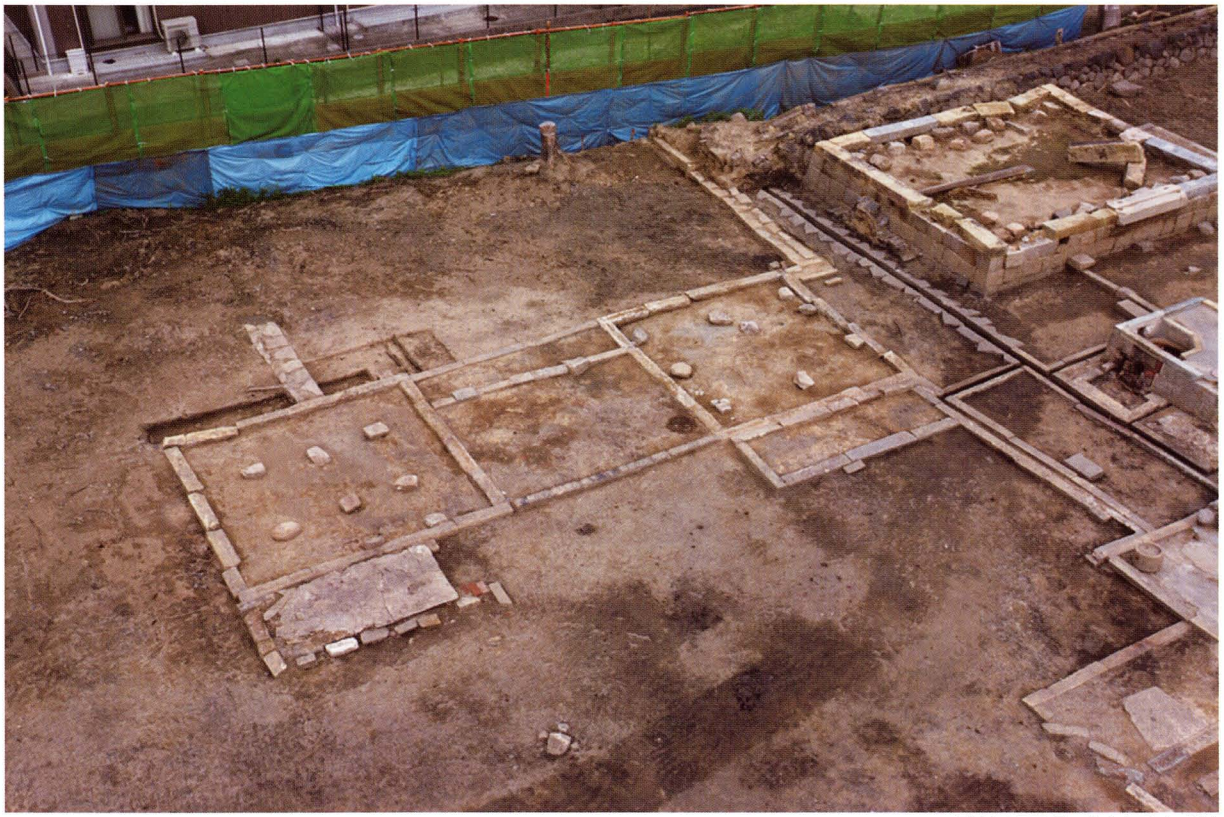
表長屋門（西より）

表長屋門東側排水施設（北より）

表長屋門西側居宅部分（南より）

表長屋門入口部分（西より）

図版七　裏長屋門



裏長屋門（南西より）

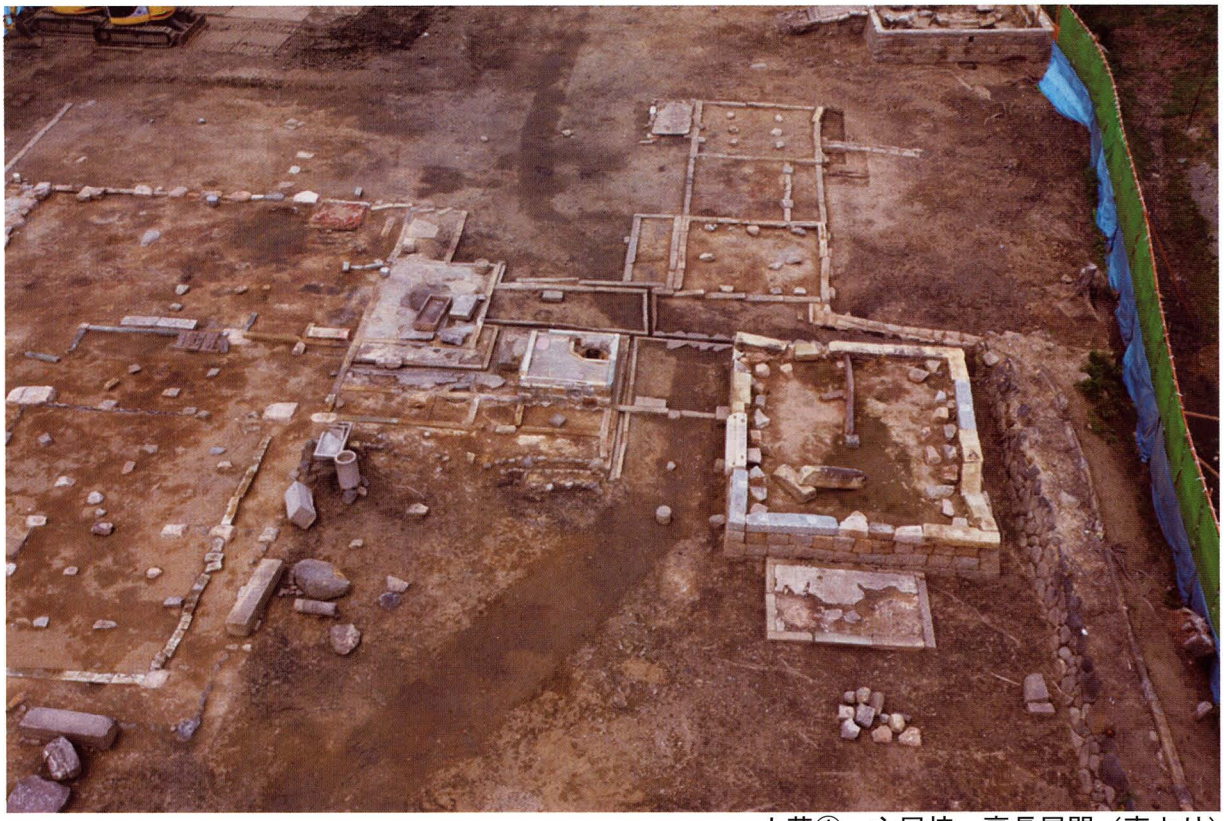
裏長屋門基礎（北西より）

裏長屋門基礎下部（北西より）

裏長屋門西側塀基礎（北より）

裏長屋門東側塀基礎と主屋棟排水施設（北より）

図版八　土蔵①屋敷蔵



土蔵①・主屋棟・裏長屋門（東より）

土蔵①と主屋棟排水施設（南西より）

土蔵①（東より）

土蔵①内部（南より）

土蔵①内部（北西より）

図版九　土蔵②米蔵

土蔵②（南より）

土蔵②（南より）

土蔵②斜路（南東より）

土蔵②基礎底部（東より）

土蔵②基礎（西より）

図版十　土蔵③道具蔵

土蔵③と船着場（南東より）

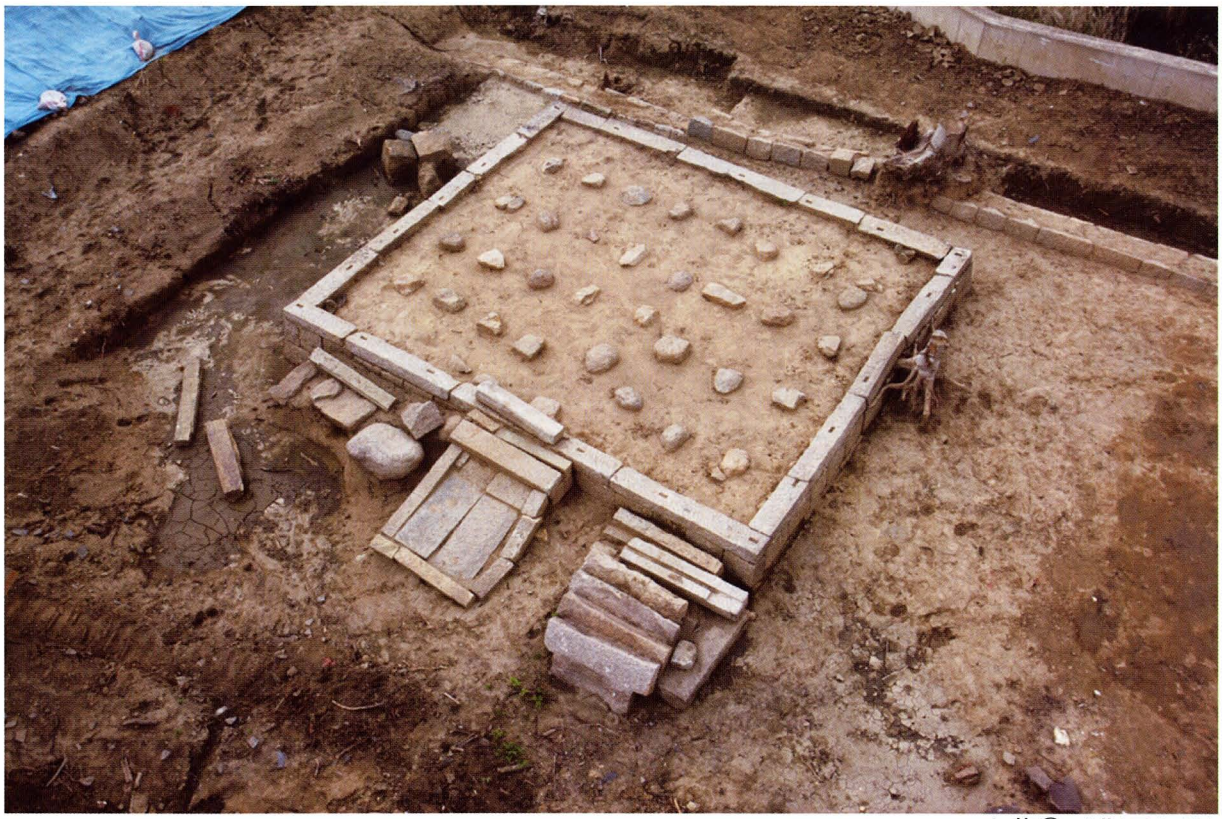
土蔵③（東より）

土蔵③基礎（南西より）

土蔵③基礎（東より）

土蔵③基礎・船着場（南より）

図版十一　土蔵④



土蔵④（北西より）

土蔵④（東より）

土蔵④基礎（北西より）

土蔵④斜路（東より）

土蔵④斜路（北より）

図版十二　庭園(1)

庭園部（西より）

庭園南半部（北西より）

築山①全景（西より）

築山②全景（北西より）

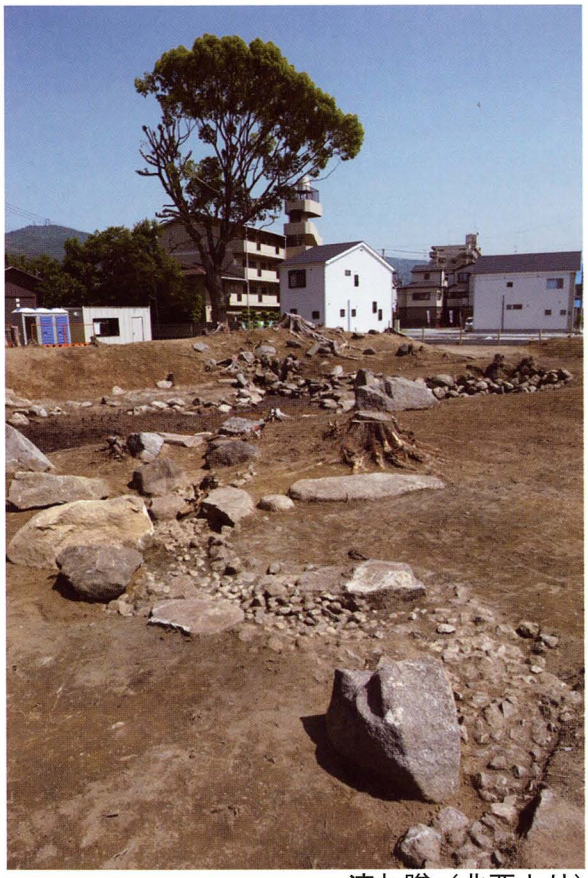
築山①と②の間（北西より）

図版十三　庭園(2)

築山②（東より）

池・流れ蹲（北西より）

流れ蹲（南東より）


流れ蹲（北西より）

庭園石（北東より）

庭園石刻印（東より）

図版十四　池(1)

池（南より）

池（北より）

池南部分（北西より）

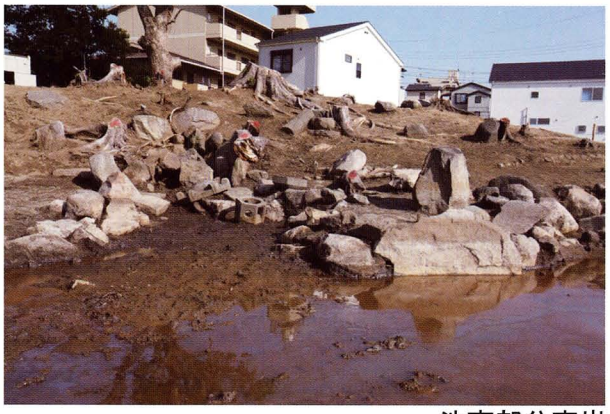
池（北より）

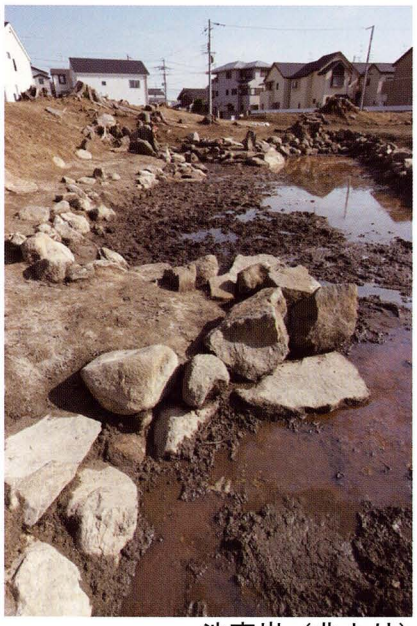
図版十五　池(2)

池北部分・流れ蹲（南東より）

池南部分東岸（北より）

池石橋部分（北より）


池南部分東岸（北西より）


池東岸（北より）

池南部分東岸（北西より）

池西岸（東より）

池北端部（南より）

池南端部（北より）

図版十六　井戸

井戸①（南西より）

井戸①（西より）

井戸①排水施設（西より）

井戸②（南より）

井戸②内部（東より）

図版十七　塀

西側塀基礎（北西より）

北側石垣（南より）

北側石垣と坐摩神社西側礎石（西より）

庭園南部分塀布基礎（南より）

庭園北部分塀布基礎（南より）

図版十八　船着場

船着場（南西より）

船着場（北西より）

船着場と門礎石
（南西より）

図版十九　その他・周濠トレンチ

表長屋門から主屋建物へ続く道（南より）

道敷き石（南東より）

坐摩神社西側礎石検出状況（北より）

鉢出土状況（南より）

周濠確認トレンチNo.1（南東より）

周濠確認トレンチNo.2（東より）

周濠確認トレンチNo.3（東より）

周濠確認トレンチNo.3（北より）

図版二十　遺物(1)陶磁器類・土製品・石製品・ガラス製品

5

23

31

25

24

27

28

32

22

47

35

34

33

図版二十一　遺物(2)瓦

図版二十二　遺物(3)木製品・金属製品

報告書抄録

ふりがな	ひらのやしんでんかいしょあとかくにんちょうさがいようほうこくしょ
書名	平野屋新田会所跡確認調査概要報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第30集
編集者名	黒田　淳
編集機関	大東市教育委員会
所在地	〒574-0076　大阪府大東市曙町4－6　　TEL072-870-9105
発行年月日	2010年(平成22年)3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
平野屋新田会所跡（ひらのやしんでんかいしょあと） （ＨＲＮ08－１）	大阪府（おおさかふ） 大東市（だいとうし） 平野屋（ひらのや） 1丁目（1ちょうめ）	27218	58	34° 42′ 26″	135° 38′ 6″	2008年 5月9日 ～ 6月13日	6680㎡	遺構遺存状況確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野屋新田会所跡 （ＨＲＮ08－１）	建物 濠 庭園	近世～近代	建物礎石 土蔵基礎 塀 井戸 池 築山 周濠 船着場	瓦 染付 陶器 木製品（樋門の板・釜蓋） 石製品（石臼） 金属製品（銭貨・火箸）	礎石が良好に遺存し、建物は複数回の建て替えが行われたことを確認

大東市埋蔵文化財調査報告第30集

平野屋新田会所跡

確認調査概要報告書

2010年3月31日発行

編 集・発 行　大東市教育委員会
〒574-0076　大阪府大東市曙町4-6
TEL　072-870-9105
印 刷・製 本　株式会社ミラテック
〒534-0025　大阪市都島区片町2-9-9
TEL　06-6354-3081

米蔵と銭屋川（北西より）